

—はじめに—

広島大学総合科学部は、当年をもって設立15年目を迎えます。そこで総合科学部広報委員会は、学部の足跡をたどるため、『飛翔』今号及び次号を15周年特集号といたしました。

現在学部に所属する誰よりも年若い総科は孔子にならって言えば、志学に相当します。この春高校生になった若者達と同じ年齢です。総科が20周年を祝う時、彼等は学部の中心となっている事でしょう。

そしてまた、学部に遅れる事10カ月のスタートを切った、この学部広報誌、『飛翔』も15歳の誕生日を控えております。この15周年特集号は、学部のものであると同時に、『飛翔』自身の15年目の証しでもあります。そこで今号では、『飛翔』を通して見た、総科15年間の変遷をメインに特集を組ませていただきました。

見方によっては短くも長くも思えるこの15年間、総科はその翼を広げ、彼方へと飛翔し続けてきました。その^{はばた}き^が断える事なく、何時までも続くようにとの願いを込めて、『飛翔』第37号をお送りします。

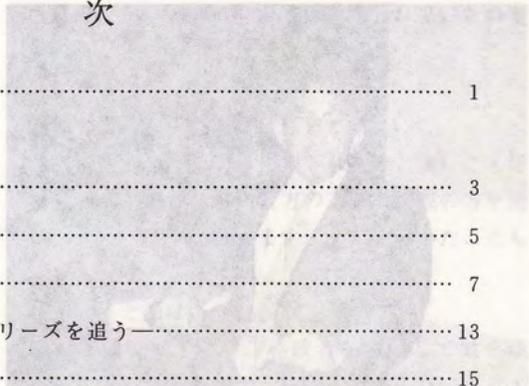
広島大学総合科学部広報委員会

實 費 天 長 社 刊 行 会 議

東京府立第一高等学校 東京府立第一高等学校

東京府立第一高等学校 東京府立第一高等学校

目次	次
学部長あいさつ.....	1
特集 15周年	
「総科号」の行方—コース改変について—.....	3
「統合移転」—飛翔を通しての移り変わり—.....	5
「飛翔」15年眺め歩き.....	7
15歳の“悩めるバイオニア”—「総科とは何か」シリーズを追う—.....	13
プレイバック講義.....	15
飛翔白書—総合科学部に関するデータ集—.....	16
シリーズ 街の総科.....	19
新任・昇任紹介.....	20
シリーズ 研究・研究室紹介.....	33
学部の記録.....	36
自由投稿欄 飛翔箱.....	42



初心忘るべからず

総合科学部長 天野 實



広島大学総合科学部が設置されてはや15年を迎えた。この間、かつて総合科学部の構成員であった諸先輩はもとより、現在在籍中の教職員、学生は学部創設の理念にそって立派な学部を作り上げるべく、それぞれの部署で最大の努力をしてきた。そして、現在広島大学に総合科学部を設置し、その発展の経過をみた教育界からは、時代の先駆性について高い評価をうけている。

学部創設から現在までの15年間を振り返ってみると、総合科学部にとっては生みの苦しさ、育ての苦しさの15年間であった。そこで学部創設、飛翔発刊15周年を迎えるにあたり、あらためて「初心忘るべからず」を自分に言い聞かせながら学部の歴史を振り返ってみよう。

総合科学部創設の発端は、昭和40年当初全国的に波及した学園紛争にあり、広島大学も紛争の渦中にあった。そして一般教育を担当する教養部が拠点となった学園紛争の中で大学改革の諸問題が提起され、問題点の一つとして教養部改革が問われることになった。全学の改革委員会で協議の結果、一般教育をも担当する学部構想が産み出され、昭和49年6月総合科学部が設立された。

総合科学部が創設の理念とした研究教育体制として、一般教育と専門教育の壁をとりのぞき、組織としては総合科学科の1学科制を取り、従来の学部の専門指向型でなく、核となる専門分野を持ちながら裾野の広い研究及び一般教育、専門教育を行う学際的な新しいタイプの学部作りを行った。このような学部創設の理念のもとに数多くの多彩な分野、経歴

をもつ教官が応募、採用され、新構想での研究、教育にたずさわった。

昭和53年3月に総合科学部は、第一回の卒業生を世に送り出したが、その年には大学院修士課程として地域研究研究科及び環境科学研究科の二つの研究科を総合科学部に設置することができた。しかしながら、第一回生が研究科修士課程を修了する年度に設置を目途としていた博士課程については設置に至らなかった。博士課程の設置は、複数の学部に関係する問題であり、数年間にわたり協議の結果、念願がかない昭和60年に生物圏科学研究科博士課程及び工学研究科に情報工学専攻が設置された。翌年には、社会科学研究科博士課程が設置され、専門分野によって各研究科に所属し、大学院教育を担当することとなり、長年の夢が達成された。

このように大学院設置の問題についてのみ振り返ってみても、いろいろと困難に直面したが、そのたびに総合科学部創設時に苦勞された諸先輩からは、総合科学部を創る時はもっともっと厳しかった、これくらいのことで弱音を吐いてはいけない、と厳しくかつ温情あふれる激励の言葉をいただいた。

21世紀における大学教育とは、総合科学部が指向する教育とは、研究とは何であるのか、答えは簡単ではないが、21世紀に向けては学際的専門領域の研究の推進であり、人間教育の確立であろう。総合科学部の前身は教養部であり、教養部の前身は旧制広島高等学校である。総合科学部は、旧制高等学校のよき伝統であった教養主義、人格主義、人間形成を強く受け継いで、一般教育の改良充実を図ってきたが、総合科学部が充実成長し、年を経るに従って研究の厳しさの中で個人が主張され、孤立化が始まっているのではないかと問いかけてみる。各人が学部構成の一員としての連帯感を強く持ち、常に新しい方向へ目を向け、研究し、教育する努力が必要ではないかと問いかけてもみる。我々の学部は、教官も学生も各々の専門分野をもちながら、文系から理系まで非常に幅広く、かつ学際的な研究教育を指向する人々の集団である。このような集団のユニークさを延ばしながら、人間教育の完成のために努力を

したいものである。

過去の経歴、出身大学・学部、専門分野の異なる構成員が共通の問題をとらえるなかで、共同研究・教育を行う。そのためには第一にお互いの信頼関係を確立することが大切であり、他の人をも正当に認め評価しあう、という努力と尊敬の念を持つことが必須の条件と言えよう。そういう条件のもとで専門の異なる人とも素直に語ることができれば、楽しい会話の中からすばらしい人間の発見、ひいては研究上の共通の課題をも見出せるのではないだろうか。このような雰囲気の中で研究や教育に精進し、その業績を学生指導に還元することによって、学生は人間的に成長し、社会においても立派な活躍ができる人材となって巣立ってくれるであろう。

このことは、学生の就職状況、卒業後の活躍の状

況をみれば、実証出来るものと信じている。総合科学部の卒業生について、求人担当者からよく聞かされることは「総合科学部の卒業生は、仕事の取り組みに物怖じしないで、幅広く勉強したことを十分に役立たせてくれます。」ということである。このように卒業生諸君も総合科学部創設の理念を職場で生かし、活躍していることを聞くにつけ、15年の重さを痛感している。

総合科学部創立15周年にあたって、今日まで総合科学部の創設、発展にご尽力いただいた多くの先輩、卒業生及び関係者各位にお礼を申し上げるとともに、微力ながら人間性、創造性、総合性の三つの柱を研究、教育に反映させ、学部の充実、発展のために寄与したい。



学部の看板を掲げる今堀誠二初代学部長
(在任期間昭和49年6月～52年8月)
(昭和49年6月撮影)



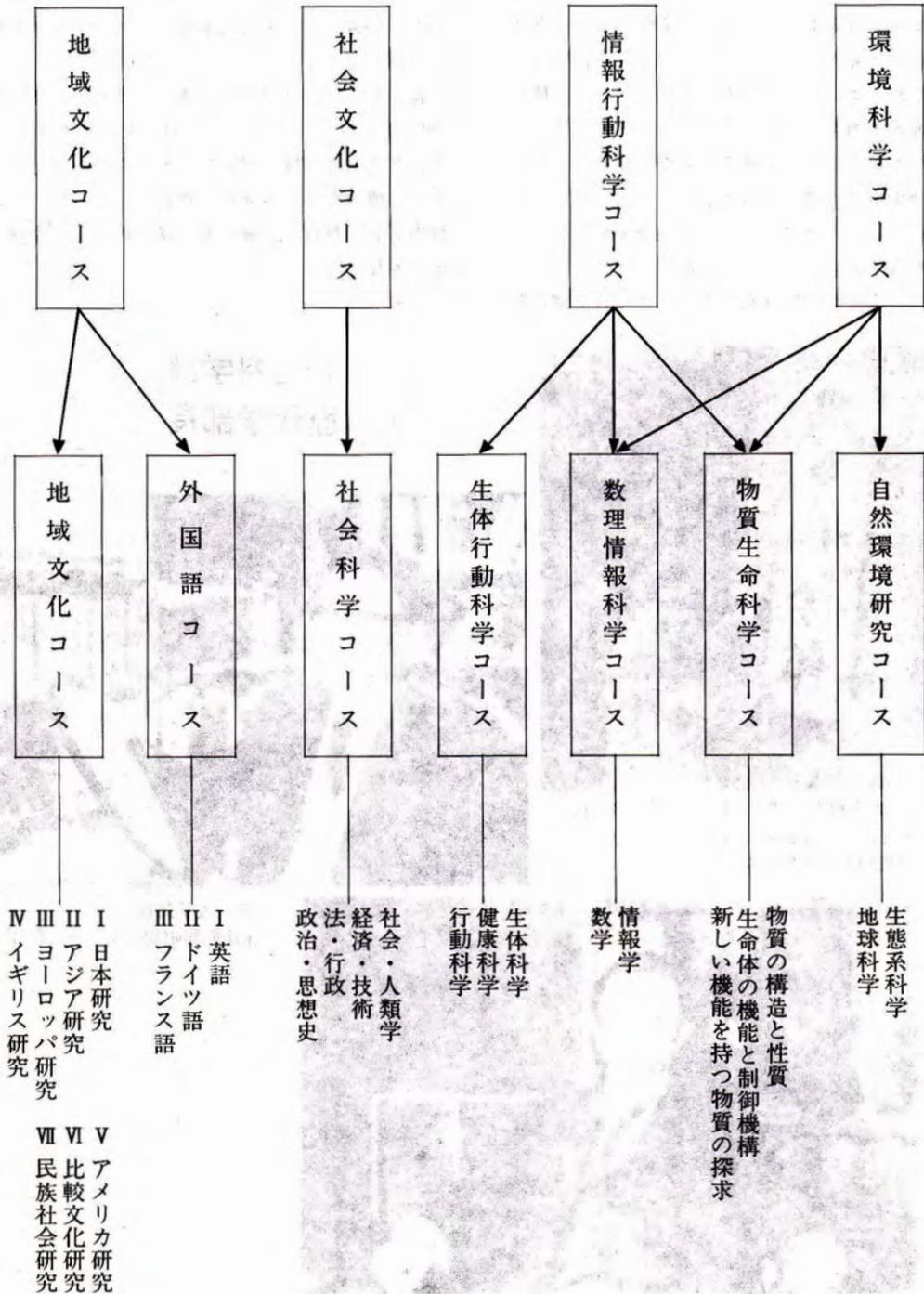
式部 久学部長
(在任期間昭和52年8月～57年3月)



岡本哲彦学部長
(在任期間昭和57年4月～62年7月)

総合科学部 歴代学部長

「総科号」の行方——コース改変について——



昭和49年総合科学部創設当初、理系は2コースであった。情報行動科学コースと環境科学コースである。情報行動科学コースには、

I群：数理情報科学を主とするもの

II群：生命科学を主とするもの

III群：行動科学を主とするもの

の計3群があり、環境科学コースには、

I群：数理学を主とするもの

II群：物質科学を主とするもの

III群：生物環境科学を主とするもの

IV群：地域環境科学を主とするもの

の計4群が設置されていた。

ところが、昭和60年7月、「一般教育と専門教育の一体化」の点から、カリキュラムの見直しをはかる、自然科学系の「臨時カリキュラム検討委員会」が発足された。これは、学際性の追求という総合科学部の理念に基づいた動きであると思われる。具体的に述べよう。総合科学部という、学際領域の研究などという新しいことを行う組織には、まず「柔軟性」が必要である。世の中が目まぐるしく移り変わっていく現代では、学問の世界も同様で、特に自然科学の変化は日進月歩である。社会が大きく変化している世の中にいち早く対応して、総合科学部もコース改変が行われていったのである。

時代に即した
コース改変へ
(理系)

前述した委員会に端を発し、明けて61年2月、教授会の席で、学部長から「抜本的なコース再編成」が提案され、5月には「コース再編成ワーキンググループ」(理系)が発足、その月のうちに理系を4コースに再編成することが正式に決定した。その後、「広島大学総合科学部コース改組構成」が文部省に提出され、了承を受けた。

62年度から、総合科学部理系コースは4コースに再編成された。しかし、まだまだ各コース内に変化の動きがあるように思われる。固定された観念のまま、今の世の中を見る学部ではなく、常に流動する社会の中で自分の地位を保持し、未来を追求できる学部、私達の手で、総合科学部を改革していこうという思いを学生一人一人が持てば、このコース改変は成功したと言える。

また、大学に入学し学ぶということがどんなことかをひとつひとつは無意味なことのように見える事象の中からいつか見出せることができれば、見出そうという姿勢を持ち続けることができれば、その人は真の意味での、「総合科学部生」に成長しているであろう。



外国語コースと総科<文系>

昭和49年創設当時、地域文化・社会文化の2コースだった文系コースも、昭和62年のコース改組により、地域文化・社会科学・外国語の3コースとなった。文系コースの改組は、理系コースほど派手ではないが、外国語コースの設置は、総合科学部に新風を吹きこんだ。

外国語コースの目的の一つは、従来の文学部や外語大の枠を大きく越えた幅広い専門分野を持った人材の養成である。例えば、語学を専門的に言語理論まで学び、情報工学も勉強して翻訳機械開発の領域に進むといったような、まさに総合科学部の理念を生かした人材が出てくることが期待されている。

また、総合科学部全コースの学生の語学力の強化、広島大学全学の外国語教育の改善も、その目的とされている。総合科学部の学生は、自コース以外の授業科目を12単位履

修するよう定められているが、この12単位を全て外国語コースの授業科目によって履修すれば、外国語を副専攻なみに勉強できるわけである。

と、このように煌々たる目標を掲げた外国語コースだが、目標と現状とはくい違うのが世の常。

外国語コースのハードスケジュールからして、このコースの学生が他コース、殊に理系コースの授業科目を専門的に履修するのは不可能に思われる。また、他コースの学生にしても、自分の専門授業科目と外国語コースの授業科目が時間割上重なってしまえば、副専攻といえるほど外国語を履修できるかどうか疑問が残る。

コース改組によってコースが分化し、一つの独立したコースが生まれる度に、コース間の壁は厚くなっているのではないか。コースについて考える時、いつも総科の理念——学際性の追求——に手の届かぬもどかしさを感じる。「総科号」という名の船は、「学際性」という島にたどりつけずに海原をさまよっている。



「統合移転」——飛翔を通しての移り変わり——

今年には総合科学部創立15周年！ という訳で「飛翔」もこの15年間を振り返ってみているのですが、この記事を読んでくれている皆さんの多くはたぶん、広島市、あるいはその近郊の地でこれを読んでいることと思います。しかし、実は西条キャンパスで、この「飛翔」を手にしていただかもしれないのです。もし統合移転が最初の計画通りに進行していたならば……。

次ページの表は、最初の計画と最も新しい計画とを比較させたものです。一見しただけで、移転計画が、いかに変化したか、と言うよりもいかに延び延びになったか、がわかります。

では「飛翔」では、移転問題をいかに取り上げて来たのか？ 以下ではそれについて述べていきたいと思っています。

「飛翔」36号間の内で移転に関する記事を挙げてみました。

- '80. 3. 25. 15号
- '81. 9. 5. 19号
- '82. 7. 5. 22号
- '84. 3. 24. 26号

を拾い出すことが出来たのですが、表を参考にしてくれるとわかると思いますが、計画が打ち出されたと総科生にも移転に関わりのある人が出始めた頃と、実際に工学部が移転した時、とくに飛翔の移転関連記事が集中している事に気付かされます。移転計画が延び延びになった事も関係あるでしょう。

さて、これらの記事の内容ですが、まず15号。これは、「総合移転に関するアンケートの結果から」というタイトルで、総科生の移転についての関心や、移転のプラス面・マイナス面、移転への要望・意見などが調査されています。移転のプラス面に、キャンパスの拡大といった設備・環境の改善が挙げられて、マイナス面には市街地から遠ざかるための不便さが挙げられている点に、今の私達が移転について思う時と共通のものを感ずります。また、アンケートを実施している事に、移転を自分達の問題として取り組んでいる意気込みが感じられる気がします。

19号は「『飛翔』学生編集部移転先ルポ」で、総

科の移転が3年後、と計画されていた頃に行われた編集部の西条ハイキングのルポです。

22号では「統合移転を考える」という特集が組まれています。この時期は工学部の移転が完了した時期で、記事は三部構成になっています。まずその1ですが「西条キャンパス・カメラルポ」というタイトルで、移転地西条のルポとなっています。その2は「西条工学部生の実態」、その3は「工学部生は語る」となっています。この年から実際に西条で生活を始めた工学部生達を通して、来たるべき総科の移転について考えているのですが、初めてのしかも工学部一学部のみでの移転だったとはいえ、かなり厳しい実情が感じられます。例えば書籍売り場が無いことや、バイクや車といった“足”が無いと買物や生活に不便であることなどです。

そういった諸問題を含めながら、福利厚生面、設備面、研究面、寮生活、周辺住民の反応、と様々な面から移転を追ったこの号は、なかなかの力作だったと言っていいのではないのでしょうか。しかし、それから少しして移転から2年後の84年に「なんやかやゆうたかてすめばいなか」のタイトルでルポが26号に書かれてから現在まで、移転に関する記事は「飛翔」から消えています。

現在の移転計画では総科は、平成4年度に移転となっています。再び総科内にも、移転と深く関わりのある人が出始めているのです。(殊に01生の人達！)

移転準備の現状を紹介しますと、今年は棟配置の計画中で7月には図面が出来ると予定で、概算要求もあります。そして平成2、3年度の2年間をかけて建設を行い、4年度から講義が始まる予定です。

移転対策委員の先生にもお話を伺ったのですが、教官側は設備を考える時どうしても研究主体に考えがちであるし、一般教育は総科で行われることも併せて、学生の要望も満たしたいこと、また学生側の組織が無いと学生の要望がつかめないとおっしゃっていたのが印象的でした。

延び延びになっていた統合移転ですが、計画は着実に進行しています。もっと移転に関心を持ち、自分達の要望を具体的なものとして提示してみればど

『飛翔』15年眺め歩き

筆者が気に入ったカットを並べておこう。

この15年分の『飛翔』を、主に挿画と写真、そして表紙に着目して眺めてみる……という企画、あっさり引き受けたはいいが、いざやってみると、15年の流れをつかむというのは至難の技である。そこで原稿のものし手が興味を引かれた辺りを中心に、実際のイラスト等も引用しつつ、漫歩してみたい。

〈2号～12号：1975年7月～79年3月〉

……とはいえ、実際には幾つかのブロックに分けて、その中でつまみ食いするのが、まとまりが良いだろう。もっとも、その分割基準は、あくまで建前テーマにこだわって、表紙の体裁によることにした。という訳で、このブロックは、表紙がイラストだった時代である。

さて、とにかく字が多い。例外的に3号はカットが多めだが、とにかく絵が、写真がない。この時代はまだ活字が敬遠されていなかったのだろうか。そんな中で印象に残ったのは、6号だった。カットはわずか二枚だったが、写真が面白い。表紙に始まり七枚の写真の内、記事関連を除く四枚全てが鶴の姿を捕えたもの。こういう“カット”的写真の使い方というのは、好感が持てる。



(6号6pより)



(16号11pより)



(17号7pより)



(15号表紙見返しより)

〈13号～19号：1979年9月～81年9月〉

表紙が写真の時代である。悲しくなるくらいカットがない。ただ、16～18号はそうでもない。可愛い絵がちよこちょこ顔を出す。やっぱり余り字ばかりだと疲れるので、こういうのは嬉しい。だからという訳でもないが、三点程この時期の『飛翔』の中で

ところで、最後に引いた15号、この号の表紙の写真は、14号までの『飛翔（前身である『総合科学』1号含む）』の表紙をズラリ並べた写真である。これを見ると『飛翔』1号の姿も……しかし現在、この1号は筆者の手許にも、厚生補導係に保存されているバックナンバーの中にも、ない。残念！

〈20号～24号：1981年12月～83年3月〉

表紙はイラスト、写真半々ぐらいの時代。割に写真やカットが増えているだろうか。

しかし、此処まで来て思ったのだが、写真にせよカットにせよ、ページの中でちこんまりし過ぎているような印象は拭えない。理由は簡単——ページを縦二分割する活字構成の枠をはみ出したり、逆に横に文章に割り込まれていたりする（つまり、今やっているような在り方）ことがないからである。もっとも、これは、いわゆるミニコミ誌的なページレイアウトを手がけることの手がけた筆者の主観に過ぎないかもしれない。



(21号1pより)

〈25号～30号：1983年11月～86年3月〉

表紙がカラー（但し、フルカラーではない）イラストの時代の到来。此処で採り挙げたいのは、何と云っても“斬気淳二の飛翔批評話”，シリーズの存在である。とにかく、面白い。下手なことを筆者が述べるよりも、見ていただくのが一番！ 後のページにまとめて再録しておくので、そちらで



Arube
(27号2pより)

どうぞ。まさに百文は一見に如かず、である。

また、写真の方にも、ちょっとそれまでにはない動き（？）があるようだ。丸い写真の出現である。こういう写真の使い方は、多用するとかえって面白くないが、適当に使えばいいアクセントになる。最近の号には見当たらないが、変形写真、ちょっと使ってみてはいかが？

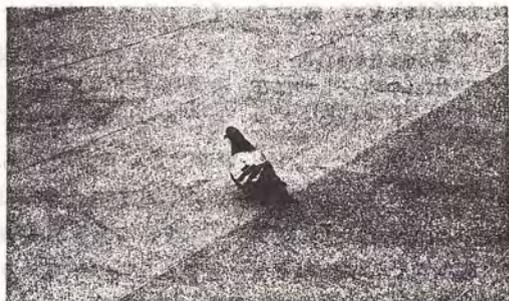
さて、表紙がイラストの場合、筆者には、誰がその絵を描いたのかを知ろうとする癖がある。今回の

記事を書く為に『飛翔』15年分に目を通した時にもやはりそうしたが、28・29号に到り、筆者は思わず奇声をあげてしまった。知る人ぞ知る笠原彰さん（^{ペンネーム}）ではないか！ 御存知ない方の為に一言説明するなら、この方は、あるSF雑誌の扉や、某作家の某作品などのイラストを描いたり、さる漫画家のアシスタント（と言って良いのだろうか？）をなさったりと御活躍中の、総科卒業の先輩である。敢えて「ある」「某」「さる」を使ったが、…やっぱ固有名詞を出すのはまずいだろうな。しかし魂消たな、本当。

ところで、その28号の3Pには、27号までの『飛翔』をばらまいた写真がどかんと据えられている。此処にも1号の姿が見えるのだが、実際、今一冊も大学に残っていないのは何故だろう。

〈31号～34号：1986年11月～88年3月〉

カラー写真が表紙の時代である。だからという訳でもなからうが、写真が多い。カットが極度に少ない。描き手がなくなったのかもしれない。

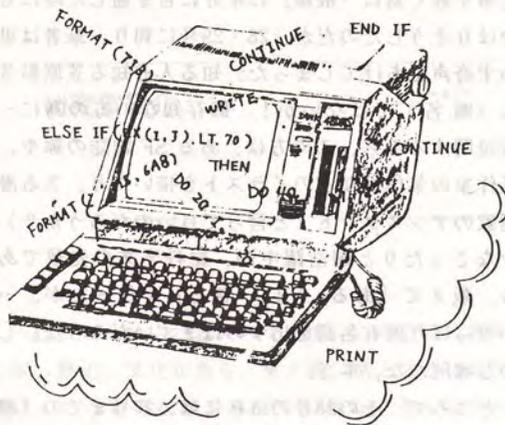


(32号37pより)

丁度31号から“街の総科”が開始されているのだが、その写真は、なかなか味わいがあると思う。特に上に載せた鳩の写真は、筆者のお気に入り。視覚に訴えるページ構成が増えているようだ。それに関連して、カット・写真のことではないが、初めて縦二分割ではない（つまり一行48字の）ページが出てきたのも、31号から（“新任紹介”コーナー）である。

〈35号、36号：1988年11月・3月〉

表紙がフルカラーイラストになった。妙に本誌中の白い部分が目につく。カットが大きいのも目立つ。何だが、穴埋めしようとしてし切れなかったというような印象を受ける。勘繰り過ぎかな。



(35号3pより)

〈これから〉

……そりゃあ、まあ、筆者（注：筆者は今号から編集に首を突っ込んだ物好きなのである）は少しは落書きに馴れている。しかし「このぐらいなら私にだって描けるよなあ」と思われてしまいそうな程度のモノしか、描けない。それでいいではないかと言われればそうだが、やはり、そういうモノが好きの方達にもっと参加してもらいたいというのが、正直なところだ。断っておくが、筆者はイラスト・カット描きは好きである。ただ、他にも描くのが好きな方にも、一緒にやってほしいな、というだけである。

しかし……偉そうにこうやって書いてきた筆者のこれから描くことになるカット類も、いつか20周年だの30周年だの記念特集号で、こんな風にまな板に乗せられるのだろうか……いや、一顧だにされないということだって、充分あり得るぞ……

(文責 定行 美佳)

『飛翔』15周年
特別ギャラリー
再録
斬気淳二の
ヒシヨヒシヨパナシ
飛翔批評話

では、先程予告した通り、25号～28号に載っている“斬気淳二の飛翔批評話”を再録致します。余計な解説なんてしないから、ま、とにかく楽しんでね。

斬気淳二の飛翔批評話 ①

(ヒシヨヒシヨパナシ)



「当店はお客様メニュー専門店でございます」

斬気淳二の飛翔批評話 ②



「はて、どこにはしごをかけるかな」

斬気淳二の飛翔批評話 ③



「なんか居心地が悪いな」

斬気淳二の飛翔批評ばなし⑥



「この中が一番きれいだよ」

斬気淳二の飛翔批評話④



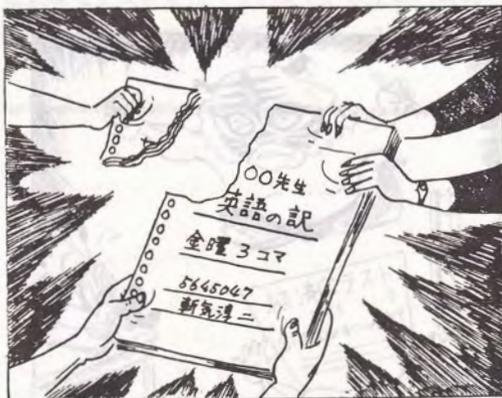
「ここ、ちがうんですって」聴講手続

斬気淳二の飛翔批評ばなし ⑦



「総科お子様ランチは最近、一品増えました」同好会繁盛

斬気淳二の飛翔批評ばなし ⑤



テスト前……「カランバ」

斬気淳二の飛翔批評ばなし ⑧



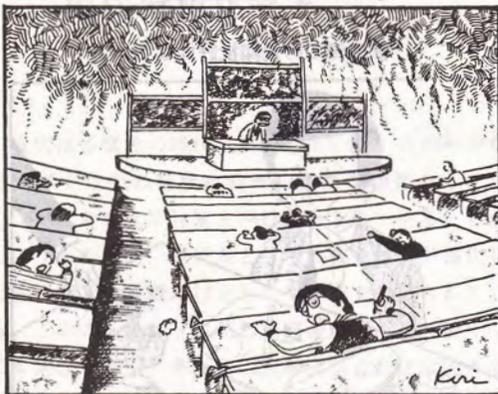
「チャップイ、チャップイ スネいくらかじってもお金ぼっちい」

斬気淳二の飛翔批評ばなし⑨



「がんばって、もうすぐ来るわよ」

斬気淳二の飛翔批評ばなし⑩



聴講手続終了…「ザ・ディ・アフター」

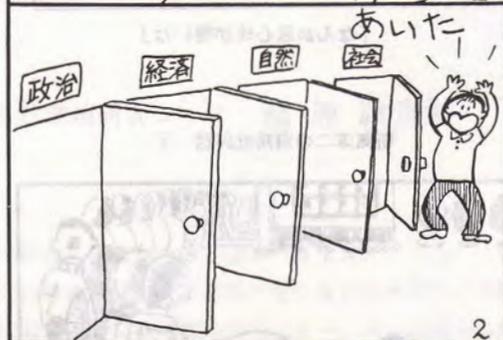
比処からのものは、恐らくは描いた作者にとって身近な問題だったろう就職を題材にしたものが多いです。特に、このシリーズ中唯一の三コマ漫画である次の作品などは……ああ、涙が出てしまいそう……。

では、引き続いてどうぞ。



斬気淳二の飛翔批評話 — ①

(ヒジョヒジョバナシ)



斬気淳二の飛翔批評話 — ②



「出席なし、ノートなしデスマッチ、あつーと一発勝負をかけたあつー」

斬気淳二の飛翔批評バナシー①



「それじゃ、お先に上がらせていただきます」

斬気淳二の飛翔批評バナシー①



「せっかく、はりあわせてできたのに」

斬気淳二の飛翔批評バナシー②



「ちゃんと返さなくちゃ、面接試験」



斬気淳二の飛翔批評話 — ③

就職情報

斬気淳二の飛翔批評バナシー④



「ああ片思い就職活動」

15歳の“悩めるパイオニア”

——「総科とは何か」シリーズを追う——

「最初にその場所に行った人間ということになりますと、その場所には前例がなく、どんなことでも出来るという可能性があるので。後になって来た人は前例があり、その前例に従ってゆけばよいと考えて、あまり物事を考えないことが多いのです。人間は考えるか考えないかで非常に大きな差があるものです。」(倉石教官談話・No. 18)

創設当時から“悩めるパイオニア”の異名をとってきた総合科学部は、15年目を迎えた平成元年度に至っても、今だに悩みつづけている……。しかし、総科生諸君はここで不安を感じる必要はありません。なぜなら、無限に悩み、考え、疑問を抱きつづけてゆくことそのものが学問であるからです。

このページでは、「飛翔」が15年間追ってきた、「総科とは何か」というテーマを振り返りながら、総合科学部についてももう一度考えてみます。

①創設の理念と構想

「一般教育と専門教育から成り立つ戦後の新制大学システムを改革し、1)一般教育と専門教育を融合した新しい形の学部教育をしていく学部、2)総合的な視野をもって主たる専門領域に加えて副専攻的な領域についても研究できる学部、として総合科学部が構想される。」(「式部先生に聞く」より・No. 13)

過去幾度となく行なわれてきたアンケート結果では、「自分の専攻したい学問分野が用意されているか」という問いに対し、平均6～7割の人が「満足している」と答えています。「自分の専攻したい」テーマがどの学問領域に入っている、また2つ以上の学問領域にまたがるものであっても、受け入れられる体制がある、ということを表しています。(尚、「不満である」と答えた人は平均1割程度です。)

②学際性とは？

「学生には2つ以上の学問領域にわたって学んでもらいたいし、また先生方においても自分の専門にこだわらず、その近接する関連領域の先生と協力して

研究を深めてもらいたい」(「式部～」・No. 13)

「実際は(学問)領域というものは存在しないのだが、ひとりの学者が全てのことを知りつくすことはできないので、学者が自分の好きな分野に勝手に名前をつけ境界とし、自ら専門化と称した」(56年度生意識調査・No. 19)

大学の講義でも、〇〇学、△△論といった耳慣れない学問の名前を耳にすることが多々ありますが、これらの新しく“名付け”られた学問達も、「学際性」と大きく関係しています。いずれも「新しいことをやってやろう」タイプの総科生には、限りなく魅力的な分野なのです。

「総科の学生をみていると、学部が学際的であるとか、広い視野がなくてはならないといったイメージが先行していて、学生もひとつのことに集中しているといけないというか、自分を自由な位置に置いておかなくてはいけないといった風潮があると思うんです。私は、もっと積極的な意味で、自分の専門を深めながらそれと平行して視野を広めていくということが大切じゃないかな、とよく考えるんです。今は、それが誤解されているような気がします」(荒井教官談話・No. 16)

反面、以上のような指摘もあります。「学際領域」と「広い視野をもつこと」とは明らかに異なりますが、前者はどの学問分野にも属さない分野、或いは2種以上の学問分野にまたがった位置に立つこと、後者はあるひとつの学問分野の上に立つことを前提条件としている、といった意味でしょう。

③学部構造

「ただ、学生の関心だけで授業を自由に受けていくとなると、安きに流れてしまうおそれがあり、効果的に学生の力を伸ばしていくには、ある程度の履修要求が必要であると思われる。そこでその方向づけとして4コースを設け、それぞれの標準的なカリキュラムをこなすことによって学生の力を伸ばせるようなシステムになった」(「式部〜」・No.13)

総科設立当時の4コースは、現在では7コースに細分されました。しかしながら各コース間のつながりが断ち切られてしまったのは、総合科学科という一学科であるメリットがなくなってしまいます。そこで、それを防ぐために自コース以外の授業科目を一定数以上とらなければならないシステムになっているコースもあります。

ただこのシステムについても、「他コースの専門12単位を自由選択の中に入れなければならないのはおかしい。本人の意志、積極性にまかすべきだ」(「じゃがいも畑は今……」・No.13)という批判は毎年出されているものです。

「また、(1年の)5月の段階で志望コースを決めている人の多さは特徴的であろう。……その原因としては、各コースの要望科目制度があると思われる。この要望により1年次の受講科目が決まってしまうようなコースもある」(「56年度生〜」・No.19)

コース決定についても、定員問題や決定時期について様々に議論がくり返されてきました。しかしコース分け自体は前述の荒井教官の御意見にあるとおり、自分の立場を決めるために、どうしても必要なことには違いありません。

④総科とは何か?

「例えば、物理学なら物理学、化学なら化学だけを勉強している学生さんと違って、色々勉強しているために、将来になってみると色々な新しい問題に順応できる性質を持っているわけです。

10年もたってみますと自分達のすぐれた性質を発見するものだと思います。言いかえれば、つぶしのきくような人間になれるような勉強の仕方をやっているのだということです」(倉石教官談話・No.18)

「文系・理系にわたって幅広く人間が集まっているせい、ユニークな学部」(地・女性)

「世にいわれる様に中途半端な学部だとは思わない。それではなぜそう言われるのか。それは学生の姿勢がはっきりせず努力を怠っている点が大きいのではないのでしょうか」(情・藤井)

「ユニークな人間、ポジティブな人間の集った所。何かあるんじゃないかという奮意気というのは、とても大切だと思う」(社・佐々木)
(「Take off Soka」・No.18)

筆者の考えるには、総科とは、「研究者」の生産ではなく、「社会人」の生産をする所です。10年ほど前のアンケートの中に、

「総科はじゃがいも畑だ(わけのわからんもんがころがっている)」

という言葉がありましたが、わけのわからん人間がゴロゴロしているのが、実社会の姿に違いなく、それゆえに総科生は卒業後、強くたくましく生きてゆける筈なのであります。

そして、「何か新しいものをやってやろう」のカタマリ。総合科学部は創設されて15年がたちましたが、学生気質は、今も(もちろんこれからも)若さと好奇心であふれています。

「総科とは何か……?」この問いを考えつづけてゆくことこそ、総科生の特権であり、義務であります。そしていつか、1人1人の正解を見つけることができれば、それが総合科学部からの、あなたへの贈りものとなることでしょう。

(文責 伊藤 多喜子)

プレイバック講義

学生を気取る日には、必ずぶつかるのが講義。出る出ない出るつもりにかかわらず、聴講期間中には嫌が上でも講義概要はめくるし時間割も作る。何より講義に参加して単位を奪い取らねば卒業できぬ。

なぞと否定的にとらえたりしながらも、稀には、この講義にめぐりあうために、俺は総科に来たんだナアという幸運もある。この“講義”というもの、過去何度にもわたって「飛翔」でも取り扱ってまいったわけだが、一体何が語られているか。

例えばおよそ10年前、2年続きで3月発行の「飛翔」で卒業生特集の一部として講義についてアンケートをしている。主な声をひろってみると……。

- 講義が広い範囲に渡りすぎている。
 - 社会文化（現在は社会科学/編集部注）コースがなおざりにされている。学生自身の自覚もないが、果たしてこれで総合科学といえるのか。
 - 今のままだと各教官の専門をつまみ食いというだけで終わってしまう。
 - 学際領域の研究をめざす、という割には、そういう講義があまり無かった気がするが……？
 - 何でも総合・ソウゴウ・そうごう……。
- 「そうごう」のように何でも売り物にすることは、私には至難のこと。
やれる人は勝手にやって下さい。

(以上 80' 15号)

- 総合科学部の講義であると意識させられるものが少ない。
- 知識のみを押しつける講義はおもしろくも何ともない。
- （社会文化コースでは）もう少し体系的な体制が必要ではないでしょうか。

(以上 81' 18号)

これを読んで、いかにも、と思うひとがどれくらいいるだろうか。多ければ多い程、総科の講義は10年前から進歩していないことになる。とはいうものの、「学際領域の授業がない」だの、「総科らしさがない」だの一方的に学生の側から声をあげるのみでは意味がないのではないか。各先生は何も全員“総合科学”を専門としているわけではなく、一人ひとり別々の御専門がある。それを自分の内部で統

合して“総合科学”にしてゆくことは学生の仕事だけれども、「総合科学」という看板を掲げておいて広く浅くの講義を与えられているだけでも学生は困る。10年前に語られたことは、とりもなおさず現在にまでのしかかっている話題と云えよう。

○私は講義とは参加する側のその題目に対する意識のレベルによって価値が決まると思います。

といった声があったことも追加しておこう。

さて、次に同じ様なアンケートで、「後輩にすすめたい講義」というのもあった。これは“良かった講義”の話なので、さっきとは違って前向きな話である。が、「単位が楽にいただけた」などというたぐいの講義以外をざっと見ると、今現在総合科学部におられない先生方の講義が多い。さすがに10年近く前の話ではしょうがないだろうが、ここのところ「いい先生がずいぶんよそへ行かれてしまった」という声はよくきく。新しい先生方のパワーを見せていただきたいものである。

ピックアップすれば、テーマや専門的な良さと志願教官のアメリカ史、天野教官の分子発生学、清水教官の社会人類学演習などに人気があった。又、話はたとえわからなくても、熱弁や学問に対する真剣さが胸を打った、という講義も人気があった。確かに知識や方法において、教官の持つすべてが理解できるわけではないのだから、講義でショックを感じることは正解なのかもしれない。

講義への出席率と学生のレベルは年々反比例しているといわれる。何の疑問もなく席についているだけなのか、意欲的に講義に参加しているのか、私より各人よくわかりだと思ふ。過去「飛翔」誌上で語られたことを、もう一度繰り返して愚痴るのはおよそ無意味だろう。個人個人の内で講義の位置は多様であろうから、差し出がましい口はたたかないが講義は自己の中で取捨選択すべき情報である、と総科生は最低わきまえていれば流されずに済むのではないか、と、振り返って考える次第。

(文責 杉原由香)

飛翔白書 — 総合科学部に関するデータ集 —

編集部

資料提供：厚生補導係、学務第一係

図 I 都道府県別入学者分布図
(昭和49年度～平成元年度までの累積のべ人数)

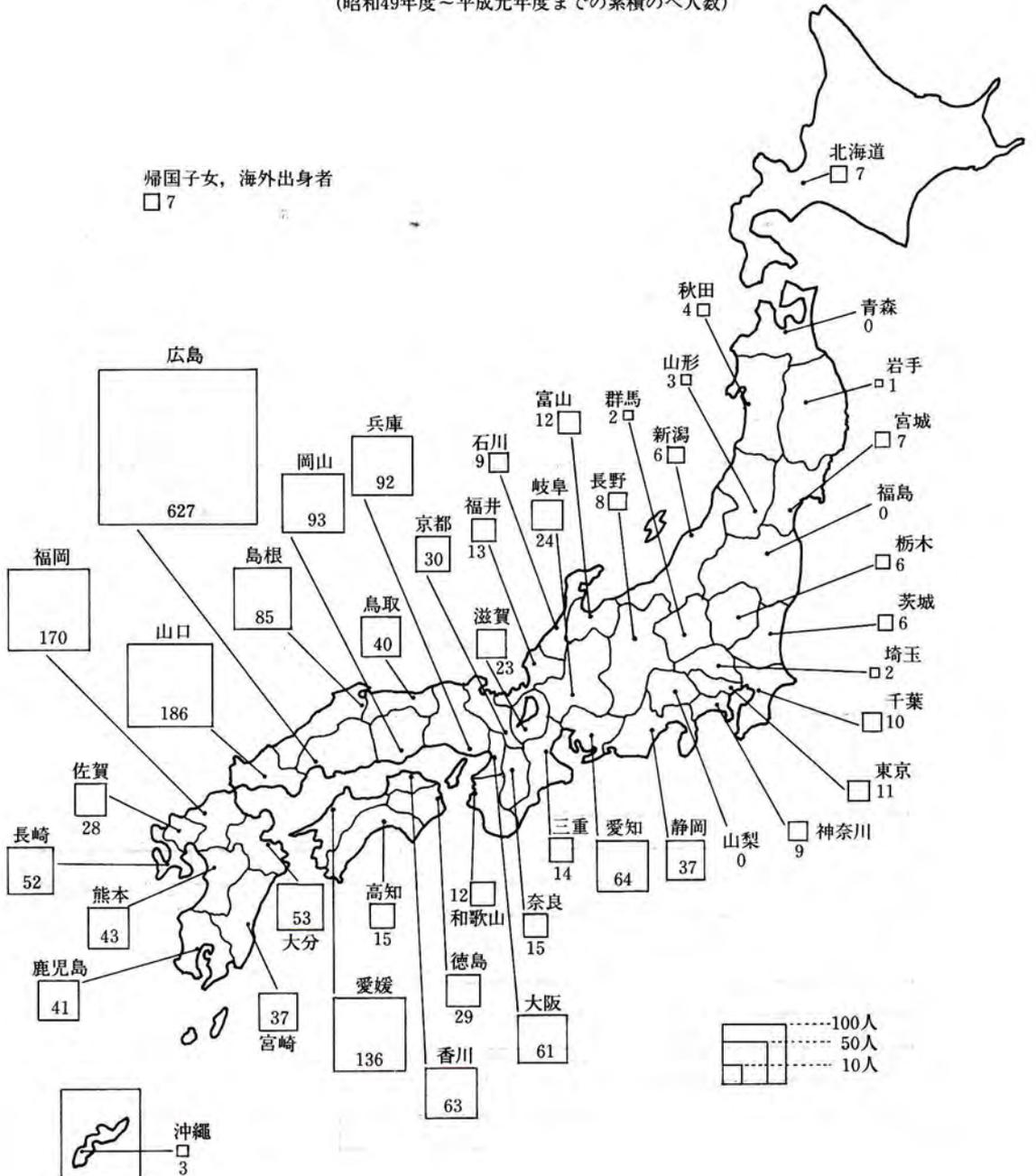


表-I 入学状況調

入学年度	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	01
入学者数	122	121	125	129	127	127	123	120	121	125	126	130	146	186	182	187
女子数	16	43	33	42	35	55	37	39	34	37	38	58	63	69	77	90
女子占有率(%)	13.1	35.5	26.4	32.6	27.6	43.3	30.1	32.5	28.1	29.6	30.2	44.6	43.2	37.1	42.3	48.1
県内出身者数	23	34	35	35	26	32	37	36	36	33	37	50	48	49	57	59
県内出身者占有率(%)	18.9	28.1	28.0	27.1	20.5	25.2	30.1	30.0	29.8	26.4	29.4	38.5	32.9	26.3	31.3	31.6

表-II 入学年度別コース決定状況調

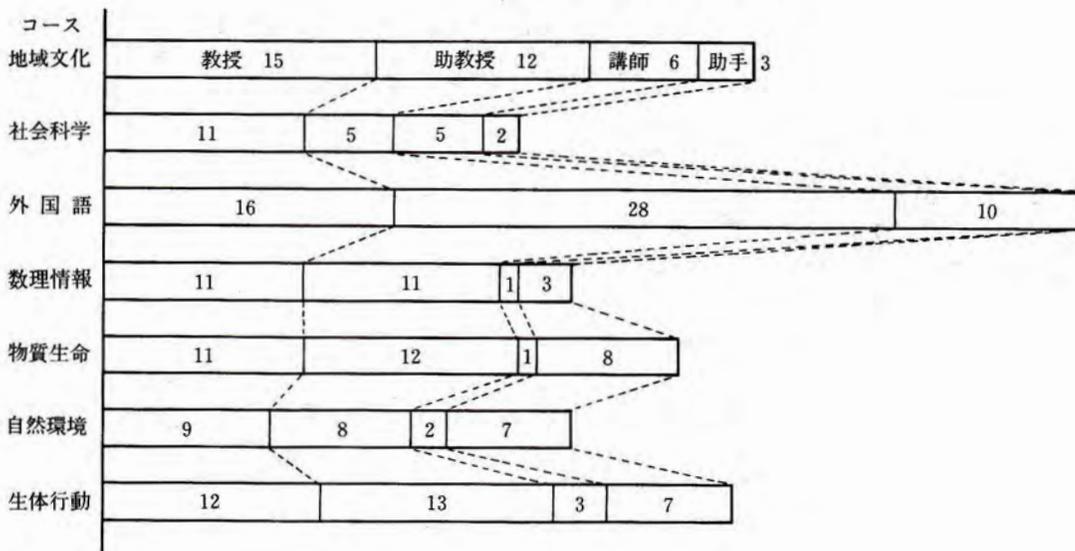
入学年度	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
地域文化	21(7)	39(24)	43(21)	29(15)	38(13)	42(27)	40(14)	35(19)	35(13)	36(17)	38(21)	34(23)	35(16)	20(13)	45(28)
社会文化・社会科学	22(1)	22(5)	28(2)	28(6)	26(7)	30(8)	28(9)	28(6)	33(3)	30(4)	26(6)	26(11)	31(18)	31(17)	35(17)
	外国語												10(7)	20(14)	20(15)
情報行動	21(5)	16(5)	28(8)	26(14)	39(16)	24(12)	31(11)	32(12)	30(15)	30(15)	27(7)	30(15)			
環境科学	14(0)	24(5)	23(5)	27(3)	19(0)	27(3)	24(2)	24(5)	28(0)	26(1)	31(4)	39(7)			
													数理情報	27(2)	24(3)
													物質生命	30(4)	11(0)
													自然環境	26(5)	14(3)
													生体行動	28(12)	30(15)

()内は女子数

注1) 社会文化コースは62年度入学生より社会科学コースに改コースされた。

注2) 入学者数と各コース別の人数総数とが一致しないのは、転学部、退学、休学等のため。

図II コース別教官構成数 (平成元年4月1日現在)



街の総科——REN-AI

ひとは不可能恋愛に憧れる。だから「マノン・レスコオ」が「曽根崎心中」が「カルメン」がうけるのだ、と云ったのは自身妻子のある男を自分のものにした女流小説家兼評論家だったと思う。けれども恋する度に心中や自殺や破滅をしては命が幾つあっても足りない。かくてひとびとは恋愛小説を読み、恋愛漫画に遊び、恋愛映画でカタルシスを感じる。恋愛に必死になるなんて、いささか次元の低い話と思えるかも、しれない。けれども自己と他者のあり様を考える時、ひいては自己と世界とのかかわりに思いめぐらす時、ひとりの存在に魅かれてやまぬ現象は重大だ。姿かたちが女優の様に美しいわけでもない、素晴しく頭が切れるわけでもない。いや果たしてそうかもしれぬ、しかしそれだけではない誰か。例えばどうしてその存在が自分に大きいのか、魅かれてやまぬのは何故か。例えば首尾よく恋愛の関係が成ったとしよう。どこまで深く抱きあったとしても、相手の存在そのものを所有できたわけではないのだ。考えても御覧なさい、自らをしてとらえきれない深遠の自己を、他者が内包することができるものか。そのままひっくり返せば、自分が他者を所有しきれ得ない道理である。

そうまで云ってしまえば、虚しく、愚かしい。まるでとらえどころのない幻想。実ることのない種なぞまかない方がよい。恋愛なぞするな。というのはいかにも短絡であろう。どのみち“するな”と云ったとて、ひとはひとに魅かれる。切ないね、哀しいね、ということはセンチメンタルリズムに溺れた想いにすぎない。本当に「哀しい」と云えるのは、理解しあいたい——ひとはわかりあうことは可能だ、と思える。そうしようと思えばの話だが——という以上の欲望を持ってやまぬひとのあり様に違いない。しかし、仏教の經典のひとつ「理趣経」では、性欲も又菩薩の境地だという。聖アウグスチヌスは「悲しむべきことだ、我々は皆クソと尿の間から生まれた」と云ったが、それは逆説的に我々が肉から無縁になることができない、ということを示しているよう。

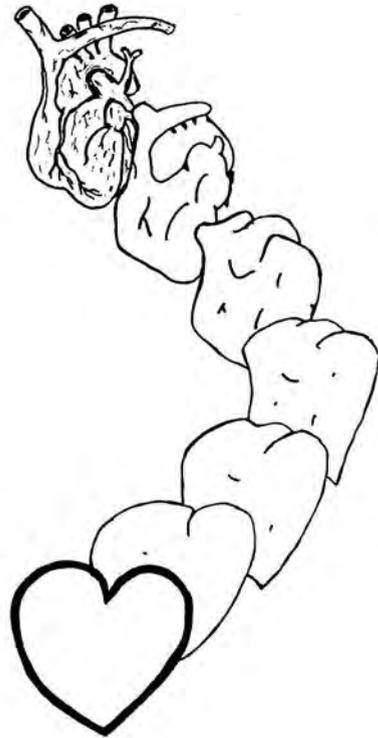
しかしながら、ひとは理屈抜きに恋をする。心は自由気ままに“飛翔”しては、時折本人の元へ戻っ

てこなくなる。いかに幻想に思えようと、甘やかで濃密な時間は、ある。悲観的な理屈を超えて、本当の結びつきを欲するひとのころだっているのだ。

かくて、ひとは不可能恋愛に憧れる。いささかもう面映ゆくなっただが、上質の恋愛映画を見た後の、恋に憧れる気分は良いものだ、と、唯それだけの話なのであった。ゴーギャンの絵の中には、こう描きこまれていたものがあったと思う。

「恋をしなさい、そうすれば幸せになれます」

(杉原 由香)



新任紹介 & 昇任紹介

現在文部省は、全国の大学に対して、今後学生数が臨時に増加する（1995年頃に大学内の学生数がピークに達し、その後また減少）ので、教官数も臨時に増加させるという方針を打ち出している。そのため広大総科でも、ここ数年新任として来られる教官が10名を越すという状態である。

そこでこの多くの新任教官および助手からの昇任教官を紹介するにあたって今回は、これらの方々の原稿依頼の他に下記のようなアンケートに答えてもらい、今まで『飛翔』の中でバラバラに記載されていた紹介欄をまとめて記載することにしました。紹介原稿、アンケート、そして顔写真と、色々な角度から新任・昇任教官の方々を知ってもらえればと、思います。

アンケート内容

1. 生年月日
2. 血液型
3. 出身地
4. 好きな異性のタイプ
5. 既婚 or 未婚
(既婚の場合は子供の人数も)

新任紹介

地域文化（カリスタ客員教授）	21
社会科学（材木講師）	22
外国語（谷本講師・石川講師）	22
数理情報（原田助教授・佐々木助教授・伊藤助教授・石原助手・中原助教授）	24
物質生命（星野助教授・浴野助手）	27
自然環境（高橋助手）	28
生体行動（西村助教授・小宮山講師・洲崎助手）	29

昇任紹介

生体行動（安藤助教授）	31
地域文化（中山講師）	31
物質生命（宇田川助教授）	32



Donald J. Calista 地域文化コース アメリカ研究

- ① 5-28-38
- ② A
- ③ New York
- ④ Very well proportioned
- ⑤ Married—3 sons, all out of college.

MY QUESTIONS FOR STUDENTS

Donald J. Calista

June 1989

During the 1989-90 academic year I am lecturing in the American Studies Department of Sogokagakubu as a Fulbright Scholar. In the U.S. I am director of the Graduate Center for Public Policy and Administration at Marist College in Poughkeepsie, New York where My wife, Margaret, who is teaching two English conversation courses at Hirodai, is director of the social work program. Although I spent some time in Japan earlier, this is my first time teaching. Of course, everyone knows I am experiencing a number of Japanese university customs: some questions will let you know what they are.

Where do the students go who stop attending classes following registration? Are they doing arbeits, studying other subjects, or playing? Or all of these? Second, how do students remember the content of the twelve courses or so that they take? Is it part of some superiority complex that students can remember enough during final exam week for some to get an A in all their courses? What am I missing in this question? The third question, I suppose, relates to a more general feeling I have.

Do the students realize they are going to face some tough questions about Japan's role in the world? Do they feel prepared to engage other people(s) as equals—not whether others will treat them as equals. This question comes down to: do Japanese students believe their leaders will take initiatives and sustain actions over a whole range of global issues? If other nations are waiting for Japanese to say what they want, what will students feel when their leaders get much less? I guess the impression I'm getting is that when Japanese students of this generation take their place in the world, will they feel well-prepared for accepting the outcomes of the rough and tumble of political leadership?

On one of my earlier visits at Meidai I did a research project on student values. I found Japanese were on the whole not so different from their western counterparts. The research found that youth would want to enjoy material advantages, but lose interest in party politics as vehicles for social change. Yet, they would focus their attention on single social issues as special causes. These issues would involve world peace, environmental concerns and related matters. As predicted, these so-called post-materialist generations in Japan sought the benefits of their economy, and spurned the importance of party politics in their lives; at the same time, they differed by not involving themselves in social causes. There is no civil rights movement by Japanese students for the anti-Asian discrimination policies of Japan. Maybe the issue is too small compared with what challenged students in the American civil rights movement? But, what about an environmental campaign similar to what youth has achieved as special issue political (and now party) activists in Europe?

In all, then, I think I can now pose a question to the students: in what ways are they different from their parents? Their parents created a world that benefited from world economic expansion, but the children may need to learn a lot more to continue that role.



社会科学コース

材木 和雄

(ざいき かずお)

1. 1957年10月7日生
2. AB型
3. 兵庫県神戸市
4. 松原千明
5. 未婚

はじめまして。本年4月より社会学の担当教官として赴任しました材木です。出身は、兵庫県神戸市です。材木という姓は神戸ではそれほど少なくはない（しかも2通りの読み方がある）のですが、広島の電話帳をみて一軒もないことを知り、あらためて地域社会の違いを実感しました。

広島にきて2ヶ月が過ぎましたが、ひととおりの行事も終わって、ようやく広島土地や大学の雰囲気にも慣れてきたところです。私は、神戸以外の土地で生活するのは初めてであり、大学も神戸大学に自宅通学をしていました。そのため、先輩のA教官からは「箱入り息子がきた」などとひやかされています。その適否はともかくも、多くの新入生諸君とさまざまな生活上の苦勞を共有することになったのは否定できません。

さて専門に関しては、学部るとき以来ずっと「産業社会学」を専攻してきています。卒論では「アメリカ社会学における産業組織論の展開」をとりあげ、また大学院では「経営参加と自主管理の比較研究」を研究題目にしました。しかし、このほかにも都市および農村における実証研究にも加わりました。

こんな私にとって、大きな転機になったのは、2年間にわたるユーゴスラビアへの留学です。その目的は当地の「労働者自主管理制度」について見聞を深め、資料を収集することでした。しかし、社会学を専攻する者にとって、なにより貴重だったのは社会主義国での生活体験です。そこで私は現代社会主義にとって、またその理解にとって、「社会学」の研究がいかに必要かを自覚しました。その結果、帰国後の研究では、ユーゴだけでなく、ソ連にも対象を広げ、両国の産業・労働社会学の展開を社会学史的に跡づけることに焦点が定まってきました。

ところでよく「社会学」とはどういう学問かということ聞かれます。私自身は「社会的行為（相互作用）を対象に意識と社会関係の複眼的視点からその構造を分析する科学」だと考えていますが、その詳しい説明は実際の講義のなかで行うほかありません。積極的な聴講と質問を期待します。



外国語コース

谷本 秀康

(たにもと ひでやす)

1. 1950年4月25日生
2. A型
3. 愛媛県喜多郡
4. 特になし
5. 既婚 2女

振り返ってみますと、70年安保闘争の直前、呉三津田高校から京都外大に進学した年、あの歴史的なアポロ11号の月面着陸がテレビで生中継されました。目の前で展開する人類史上初の劇的なシーンを食い入るように見詰めていた私は、同時通訳者の草分けである西山千氏の素晴らしい通訳を聞いていたく感激しました。

その頃、私は大学の英語の授業に物足りなさを感じ始めていたので、思い切って京都YMCA同時通訳者養成コースの選抜試験を受けたところ幸運にも合格する事が出来ました。そこで一年間に渡る厳しい訓練と更

に一年半の研修期間を経てプロの通訳者としての道を歩みはじめました。しかし、通訳の現場を踏むうちに知識不足と、英語のみならず母国語である日本語の語学力不足を認識し、言語や文化を異にする人々の間の意思疎通をはかる事がどれほど難しいかを痛感しました。そこで大学院に進学して異文化間コミュニケーション論を学び、修士課程修了後、自分の語学力を最大限に活かす事の出来る広島 YMCA 外語学院に奉職しました。

その後この三月までの12年間、実用英語の指導に携わる傍ら通訳者としても様々な国際会議やセミナーにかかわって来ましたが、四月一日付で、思いもかけず総合科学部の教壇に立つ事となりました。昭和天皇の崩御に伴って元号が平成と改まった年に自分の人生の大転換の時期が偶然重なり、何か運命的な物を感じています。これからは、私の学んで来た事を学生諸君に出来るかぎり還元していきたいと思っています。



外国語コース

石川 達夫

(いしかわ たつお)

1. 1956年 3月19日生
2. O型
3. 東京都中野区
4. 特になし
5. 既婚

私は東京生まれ東京育ちですが、別に東京に変な執着はありません。プラハに留学し、パリにも暫く住み、その他のヨーロッパ諸国にも行って、人間至る所青山ありだと思に至りました。このたび広島に来てみて、広島には広島なりの良さがあることを見い出して、ここでの生活を楽しんでいます。

ただ、今の所一つだけ大変気になっていることは、広大は図書館が貧弱だということです。私は東大の学生時代、広い図書館をいわば知の遊園地にし、東大の裏の上野公園を散策の場にして、気が向くと公園内の美術館や博物館に足を踏み入れたり、文化会館で音楽を聴いたりしていました。そんな生活が、青春特有の漠然とした憧憬や鬱屈を慰め、手なづけ、教化してくれたものです。プラハやパリでも、そういう文化的条件が整っていました。広島は地方都市としては文化的条件は相対的には良い方なのでしょうが、絶対的な基準から言えば、大学図書館をはじめとして、やはり多少不備があると言わざるを得ないでしょう。いやしくも大学に入って学問をする以上、何をやるにしろ、文化的感受性だけは磨きたいものです。学生諸君には決して、地方的な狭小性には陥って欲しくないと思います。そして、そのためには、諸君を取り巻く文化的条件に多少不備があることを自覚しつつ、積極的な努力をして欲しいと思います。私は今のところ主にロシア語と英語を担当し、まれに言語芸術論を講義するだけですが、その限られた範囲の中でも、諸君の文化的感受性を少しでも磨くよう、微力ながら努力していきたいと思っています。

人生というのは恐らく、真の自己へと向かう漸近線を（それはジグザグの漸近線かもしれませんが）死ぬまで歩み続けるものなのでしょうが、自分をより深く豊かにしていくためには、牢獄のような狭い自己の殻を破って絶えず自己を広げ深めていく努力が必要でしょう（それは大変に難しく、また苦しいことです）。そして、そのために何よりも必要なのは、受容力のある、知的そして感性的な感受性ではないでしょうか。特に総合科学部には、学生にも教官にも、そのような受容力のある感受性が求められていると思います。



数理情報科学コース

原田 耕一
(はらだ こういち)

1. 1950年6月22日生
2. O型
3. 広島県
4. 略
5. 既婚 1男1女

数理情報科学コースへ4月1日に着任致しました。こちらへ参るまでは、本学工学部におりました。つまり、西条から広島市内のキャンパスに、移転に逆らって移動したことになります。工学部時代の所属の正式名称は、工学基礎（留学生）でした。この括弧書きの留学生というのは曲者で、私の顔がどこか日本人の平均から少しずれているのと相俟って、よく私自信が留学生であるのと勘違いされました。留学生を工場見学につれて行けば、日本語がたいへん上手ですねと言われたり、留学生の集いに出かけると、どこの国の出身かとよく聞かれたものです。ほろ苦い経験として、生物生産学部が移転した直後に、学内の食堂で食事をしていたとき、生物生産学部の留学生に英語で話しかけられ、こちらも英語でいろいろと喋って、最後に、相手が、ところで私はどこの出身かと聞いてきたときは参りました。相手に気まずい思いをさせたくないし、かといって嘘をつくわけにもいかないので、アジアの出身だが、君は南米の出身だから、距離的にアジアの国は全部同じに見えるのだらうと、苦勞してはぐらかしたのを覚えています。このことがあって以来、留学生に間違えられていそうだと判断したときは、私は雰囲気その他は少し日本人離れているかもしれないが、実は日本人で、ご希望なら英語でもお話のお相手も致しますと前置きして会話に入るようにしています。

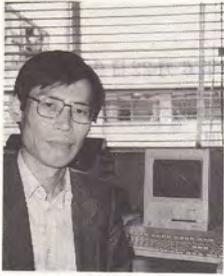
さて、私の専門分野は、コンピュータ・グラフィックスです。コンピュータ・グラフィックスは1960年代の始めに産声をあげて以来、日進月歩の発展を遂げ、現在では計算機で図形を得るための基本的な手法はすでにほとんど出尽くしたといわれています。従って、今は、応用の時代で、コンピュータ・グラフィックス画像を用いた芸術活動から、様々の学問分野におけるシミュレーションへと広く用いられています。しかしながら、画像データを計算機で処理するための多量のデータは、今の計算機をもってしても扱いにくく、高速データ処理法は、現在も研究対象となっています。私は、計算機応用と数学的手法確立との中間の立場からコンピュータ・グラフィックスの研究に携わっております。

このアジア出身者を宜しくお願いします。

数理情報科学コース 佐々木 武 (ささき たけし)

高校まですごした土地にもどって2月たちました。専門は数学です。中でも、精神的には19世紀—20世紀初めの頃の数学に興味を持っています。数学は真理の積み重ねで歴史性はないことができますが、どういう対象に意欲をそえられるかには、その人ないし社会の歴史性があります。国がらといわれたり、その大学の特徴といわれたりするの、その一種でしょう。先日、中学の同級生に“まだ数学にすることはあるの”とか、“毎日計算ばかりしているのか”と尋ねられて、まあその通り、と答えたところです。実は、数学には“すること”——数学的現象といわれる——が沢山あります。何しろ、世界に数学で暮している人が2万ないし5万人いて、彼等を悩まし続けている訳だから。

さて、広島も変わりました。1945を境に変わりやすかったのでしょうか。ただ、国際平和都市という表向きの呼称には、市民のいない都市という響きがあると思いますが、どうでしょうか？



数理情報科学コース

伊藤 史朗
(いとう しろう)

1. 1948年1月30日生
2. O型
3. 山口県小郡町
4. なし
5. 既婚 1男1女

その昔、一期校二期校という言葉が通用していた時代、すべり留めにと軽い気持でうけた某大学の、この分野に進むにはまず数学の勉強をと心得違いの発想で選んだ数学科、どこかで何かが狂い出し、入学してしまったのみならず今なお数学の研究中。事の始めの志よ今いずこ…。とはいえ今の仕事は、何とかゲームならずとも、のめりこんだらやめられない。

という訳で4月より数理情報コース・基礎科学研究(でよかったのかな?)にまいりました伊藤と申します。専門は代数学、その内で可換環論の仕事をしております。今までは特異点の性質を念頭において研究して来ましたが、新しい環境ということでもあり、別の方向・分野との関わりも探ってみたくと思っています。又、ワープロ以外では計算機とは無縁などと考えていた私の研究分野も最近はそうも言っておれなくなりそうで、研究にも使えそうな数式処理のソフトが登場しはじめております。

総合科学部に赴任したといっても、実のところ、移動の距離は約100mくらいなのですが、総合科学部は教養部であったところと比較すると大きく変貌してしまっていますから、私にとっては新世界同様ですので、よろしくをお願いします。



数理情報科学コース

石原 哉
(いしはら はじめ)

1. 1958年2月21日生
2. O型
3. 東京都狛江市
4. ?
5. 既婚 1男1女

山田：まず最初に、生年月日と血液型は？ ついでに出身地も。
 石原：生年月日は昭和33年2月21日で血液型はO型だよ。出身は東京。
 山田：出身校など経歴は？ 高校あたりから。
 石原：高校は神奈川県桐蔭学園高校で、大学は東京工業大学、大学院も東工大で、去年の10月に博士課程を中退して、広大に。
 山田：うーん、計算があわんとちゃいますか？ いま31才でしょ。
 石原：君は細かいこと気にするタイプなの？
 山田：そういう訳でもないんやけど……。
 石原：ま、いいか。学部を卒業してから4年ほど三菱総合研究所というところに勤めていたんだ。
 山田：へえー。ところで先生はいまどんな研究をしているんですか？

石原：構成的数学というんだけどね、簡単にいうと計算機にできることだけを使って数学をやろうということかな。だから、何かの存在を示すにはそれを求めるアルゴリズムを与えなければならないんだ。排中律なんて成り立たないし。

山田：排中律って、A または A でないってやつですか？

石原：そう、それを構成的に示すには A か A でないか判定するアルゴリズムがなくてはならないんだ。一般的にはそんなものない。

山田：そんなんで数学ができるんですか？

石原：できるよ。僕はそれで解析学をやっている。そうだ、今度いっしょにゼミしよう。

山田：……。ところで、広島の印象は？

石原：おや、話題を変えたね。そうね、東工大と比べて大学も学生もとにかく明るい。女の子が多いからじゃないかな。

山田：最後に、先生のひいきの球団は？

石原：もちろん、広島東洋カープだよ。長内っているだろ。彼と高校で同期だったんだ。

山田：へえー。先生は広島ファンですか。僕は巨人ファンです。

(協力：数理情報科学コース前田研・山田美治君)



数理情報科学コース

中原 早生

(なかはら はやお)

1. 1951年4月29日生
2. A型
3. 東京都世田谷区生まれ(6カ月)
4. 小宮悦子
5. 既婚 2男

四月に広島にやって来ました。生まれてから10度目の引っ越しです。これまで、関東と関西の間だけを往き来していたので、とまどう事も多そうです。

広島といえば牡蠣ですね。生牡蠣が大好きなので早く冬が来ないかと心待ちにしています。

広島はカープの町です。残念ながら、タイガースファンの一人としては、居心地が悪そうです。タイガースの暗黒時代はやっと終るのだろうか。

広電は、路面電車の宝庫です。マニアとまではいかないけれど、鉄道ファンの一人としては楽しい町です。学生時代に親しんだ京都市電も走っています。扉の位置の変更など大きな改造がなされているのが残念ですが。

そして広島はお酒の町だそうです。お酒が大好きな私としては、これだけでも来た甲斐があります。西条に移転後は、毎日造り酒屋めぐりをしてしまいそうです。前任地では、学部生や大学院生とよく飲みに行っていたのですが、こちらでは飲み仲間はまだ居ません。皆さん飲みに行きましょう。

忘れていましたが、数理情報コースに所属していて、プログラムについて数理的側面からの研究を行っています。ちょっとしたプログラムでも、誤りのないものを書いたり、正しい事を示す事はなかなか苦勞します。正しいプログラムを作成する過程を手助けする理論やシステムを作る事が現在の興味の対象です。

研究とは別に、計算機と戯れるのが大好きなので計算機の部屋に居る事が多くなります。それで研究室にいる時間が少ないと思いますが皆さん遊びに来て下さい。



物質生命科学コース

星野 公三

(ほしの こうぞう)

1. 1948年6月7日生
2. A型
3. 栃木県日光市
4. 篠ひろ子
5. 既婚 3男

私は今年4月1日付で物質生命科学コース基礎科学研究構座に着任しました。専門は物性物理学の理論、特に液体金属・合金などの不規則系の理論的研究です。これまで、学部・大学院などの約10年間を仙台において過ごし、1年半の英国留学を経て新潟大学工学部に赴任し9年間研究教育にたずさわりました。おおよそ10年単位で仙台→新潟→広島と南西に移動してきました。新しい環境の中に身を置くのは、慣れるまでは何かと大変ですが、新たな気持ちで研究教育に励むには好ましいことです。

これらの3つの土地に共通していることは海と島があるという点です。仙台の松島と広島の宮島は日本三景のうち2つですし、新潟には佐渡ヶ島があります。いずれも海の幸に恵まれ、おいしい米、水、日本酒……が豊富です。同じ海でも、日本海と瀬戸内海は非常に違いますが……。

広島大学に赴任して来てからまだ2か月足らずですが、活気に満ちた大学という印象を受けています。総合科学部が目ざしている学際的領域の研究教育は今後ますますその重要性を増すと思います。幸い、大学院博士課程も設置され、専門的知識を深める機会にも恵まれています。学生諸君は、広い視野をもちつつ、興味あるテーマを深く追求する態度を身につけて欲しいと思います。私もそのような観点から研究教育に尽力するつもりです。どうぞよろしくお願い致します。



物質生命科学コース

浴野 稔一

(えきの としかず)

1. 1957年9月17日生
2. O型
3. 山口県厚狭郡
4. クールな人
5. 未婚

4月に着任致しました浴野稔一(えきの・としかず)です。専門は物性実験物理学で、3月までいた青山学院大学では、初期の頃は低次元強磁性体中のスピン孤立波(磁気的ソリトン)を光磁気効果により観測する事を試みていました。その後、金属クロムのスピン密度波(SDW)の特異な変調構造(ソリトン格子)が電子状態密度に及ぼす効果、つまりSDWのエネルギーギャップ内での状態の存在、を直接観測しようとしたことがきっかけで、トンネル分光法という実験手段を学び、これを用いてSDWの他に、電荷密度波(CDW)、超伝導体の電子状態を調べることを始めました。その研究の最中に高温超伝導体が発見され、この超伝導を研究するのにトンネル分光法は恰好の実験手段ですので、幸運にも逸早くその研究に参加することができました。

さて、広島大学での生活は約2ヶ月になりますが、総合科学部の空気に段々と馴染んでこの学部を知る程に、そのカバーする学問領域の広さに改めて驚いています。私のいた青山学院大学には生物・地学系の研究室は無く、また私自身、中学・高校時代には地学・地理・植物など自然に接する事が好きでしたから、総合科学部でこれらの分野を間近にするのは新鮮であり、懐かしくもあります。そういえば、中学生の頃、確か理科の

教材だった方鉛鉱を針金で探り電波を受信していたことを思い出します。今から考えるとこれは点接触分光という一種のトンネル分光の素子を作っていたことになるのですが……。

広島市内を歩いてみると、市電の走る街中の風景がめずらしく、新鮮に感じられました。また、川沿いの散歩道から眺める、川と橋と緑と街とが調和した景色も素晴らしい。

これからはここ広島大学で新しい研究テーマに取り組んで行く訳ですが、新しい環境で気持ちも新たにとらわれない発想をもって研究に打ち込んで行きたいと思います。



自然環境研究コース

高橋 日出男

(たかはし ひでお)

1. 1959年9月6日
2. O型
3. 東京都保谷市
4. 友里千賀子
5. 婚約中

昨年10月1日付で着任いたしました自然環境研究コースの高橋日出男です。

私は東京の下町に生まれまして、その後、武蔵野台地の畑に囲まれて育ちました。東京からの脱出を企て(いわゆる都落ち)、大学(共通一次試験の第一期生です)からは宮城県の仙台に移り住み、そこで9年半過ごしました。ついこの前まで大学院に入院していたので、まだ学生気分が抜けず困っております。

専門は気候学ですが、主に東アジアにおける梅雨前線の形成過程を、大気の流れと水物質(水蒸気や雲)のふるまいの時間変化という観点から解析的に明らかにしようとしています。梅雨現象は非常に複雑で、たとえば、チベット高原が梅雨に影響を与えているということは多くの人が認めるところですが、具体的にどのようなプロセスを経て影響を与えているのか、さらにインドモンスーンとはどのように関連しているのか、年々変動がなぜ生じるのかなど未解決の問題が山積しています。また、中緯度帯において、梅雨ほど明瞭な季節性をもって現れる雨季はめずらしいので、このことが生態系や文化史に与える、あるいは与えてきた影響にも興味をもっています。

これといった趣味はないのですが、運動不足の解消と風呂代わり(?)のため5年ほど前に水泳を始め、たまにプールに行って1000mを25~30分かけてのんびり泳いでいます。なお、特筆すべき音痴でして、中学校時代の合唱コンクールのときには口だけバクバクしていればよいといわれ、いたく傷ついた記憶があります。特に一定量以上アルコールが入るとひどくなり、まったく音程が取れなくなりますので、くれぐれもカラオケ等の強要はなさないで下さい。

こんな私ですが学生とのパイプ役として、また、かけだしの研究者として努力して行きたいと思います。至らぬ点等御教示頂ければ幸いです。



生体行動科学コース

西村 良二
(にしむら りょうじ)

1. 1949年11月6日生
2. O型
3. 福岡県八女市
4. 桃井かおり
いしだあゆみ
石野真子(長淵剛と
結婚する前)
5. 既婚 2男1女

4月1日づけで、生体行動科学コース人間行動研究講座に着任した西村良二です。私は、九州大学医学部を卒業した後、精神療法や精神分析の領域では、当時、西日本のメッカと言われていた福岡大学の精神科へ入局しました。そこでは、14年の間、精神科疾患の患者さんたちの診療、治療法の研鑽、それに医学生や若い研修医の精神医学教育に携わってきました。特に、診療面では、思春期・青年期の発達病理に力を注ぎ、個人療法以外に、夏には治療キャンプ、集団精神療法など手がけ、地域サービスとして学校の現場と提携して、学校精神保健などにも関心を払ってきました。

こういう話をしますと、「何故、広島大学へ来たのですか」と怪訝な顔に出会ったり、「総合科学部へ来て良かったのですか」と不安げな顔に出会います。私の答えは、「いろんな境界領域の学問の刺激にさらされたいと思って」と謙虚なものです。広島大学の、いろんな先生や学生と出会って話をうかがい、「ここでは、自分の思っていることがやれそうだと確信しました。とりあえず、専門科目としては、「精神医学」や「心理療法」を担当します。

私は、精神医学、それも「患者さんを治す」という臨床一本槍でやってきたものですから、総合科学部での人との出会いは、とても新鮮で、関心をそそられている毎日です。福岡から広島へやって来て、「よかった」というのが、実感です。

誇りある広島大学の一員として、教育・研究に大いに打ち込もうと思っておりますので、どうぞ、よろしくお願いたします。



生体行動科学コース

小宮山伴与志
(こみやま ともよし)

1. 1958年11月26日生
2. O型
3. 神奈川県相模原市
4. 星野知子
5. 既婚 3男

今年の3月25日に筑波大学大学院を修了し、息つく暇もなく4月3日に辞令を受け取り、総合科学部の一員となりました。所属は生体行動科学コース・保健体育講座です。私は、生まれたのは東京都世田谷区、育ちは神奈川県相模原市、青春時代は千葉県と茨城県で過ごしました。また、ここ数年は東京を中心に研究活動をしており、関東地方と縁の深い生活をしておりました。広島を初めて訪れたのは昨年5月で、学会参加のためでした。その時の広島の感想を友人に聞かれ「海あり、山あり、川ありでなかなか良いところだ！。住みたいぐらいだよ。」などと冗談をとばしていたところ本当に住むことになり、人生は分からないものだと実感した次第であります。

さて、新しい生活が始まってから2カ月が過ぎ、近所の人とも交流が出来始めました。最近では、近所の子

供を預かったり、みかんや葱などのおすそわけをもらうこともしばしばで、かみさんは大喜びしています。また、私もちょっとした会話に加わったりして交流を広げています。そんな時、初対面の人は私が大学に勤めているのに気付くと、必ずと言っていいほど「ご専門は？」と聞いてきます。先日も近所の電気屋の主人と話をしたときやはり同じ質問を受けました。そこで、「保健体育です」と答えましたが、それでも飽き足らなかった様で、「体育の何がご専門ですか？」と追い打ちをかけてきました。そこで、素人の人にも何事も包み隠さず誠実に説明するのが使命と思い「随意運動の調節機序に関する研究をしています。特に脊髄反射回路の機能に興味があって、ヒトにおける脊髄単シナプス反射であるH反射を用いて……」などと答えたところ、その御主人は驚いたような顔をして「体育の先生が研究なんかするんですか……？」と言いながらこちらをじっと見つめます。「しまった！ どんない運動種目をしてたのか知りたがっているんだ」と気付いて、「学生時代は陸上競技の走り高跳びをやっていました。最近、基礎スキーに凝っていて、SAJの準指導員です。」と言うと、御主人は満足そうな顔をして納得してくれました。この様な会話を何回となく経験しましたが、一般人には体育の人間が基礎的に研究にかかわることが不思議に思われるようです。また、研究成果がオリンピックのメダル数にどのくらい貢献したのかといった発想も多いようです。私の研究は金メダルに貢献する可能性は極めて少ないと思いますが、J. Piagetの言葉「はじめは全然役に立たぬと見えたものが、実はゆたかな応用を生み、思いがけぬ結果になった、ということがありうるからである……」を励みに、これまでの研究をさらに発展させ、深みのあるものにしてゆきたいと願っています。



生体行動科学コース

洲崎敏伸

(すざき としのぶ)

1. 1955年6月22日生

2. A型

3. 広島市

4. うちの奥さん

5. 既婚 1女

私たちの研究室に「としさん」が出現し始めてからかれこれ二ヶ月が経ちました。オーストラリア、ドイツ、高知と渡りあるいて来られたと聞いていたのでいったいどんな先生なのだろうと思っていましたが、これがまた知る人ぞ知る“となりのトトロ”にでて来るさつきちゃんとめいちゃんのお父さんのような人だったので、第一印象は…。身長は178 cm、細身（最近おなかの脂肪を気にされているようですが）で顔はいまにも I feel coke! と叫びたくなるようなさわやかテイスターです。ところがこの「としさん」、科学者の悲しいさがとても言いましょうか、とにかく探求心旺盛、しかもいたずら好きというやっかいな性格の持ち主だったので。まず物を持つと“おべ、おべ”と言ってなんでも分解してしまう癖があり、しかもそれがもとに戻る保証はありません。またいきなり1500円相当のパンの山を買って来てさんざんおいしそうな香りを研究室中に漂わせておきながら“あーおいち、でもあげないよーん！”と言って青春真っ盛りの腹ぺこ小僧どもを翻弄するところなどは見上げた根性と言うべきでしょう。このような人は見かけによらないと言うことを身に持って教えて下さった「としさん」に感謝しながらも、次は何をされるのだろうとおびえているのは私だけではないはず。こんな“おちゃっぴー”「としさん」を一目見てみたいという方がおられるなら、お昼頃生協に行ってみて下さい。カレーパンか陳さんの蒸しパンを持ってどっちにしようか真剣に考えているちょっといい男がいたらその人が「としさん」です。最後になりましたが、「としさん」は洲崎先生と言うと返事をしてくれないので気をつけましょう。

としさん語録……おやまあー、あによおー、細かいことを言うようですが…



生体行動科学コース

安藤 正昭

(あんど まさあき)

1. 1945年10月31日
2. AB型
3. 山口県長門市
4. 女であればだれでも
5. 既婚 3女

田舎の高校を卒業して以来広島大学とは22年の長いつきあいになります。その間東京で4年間、アメリカで1.5年間生活していますが、今だに広島大学とは縁が切れず現在に至っていますが、総合科学部には1975年に赴任し、以来ウナギの海水適応の仕組みを知ろうと研究を進めてきました。特に腸における水吸収の機構とその調節機構が主たる研究テーマです。生命を維持するために水が不可欠なことは皆良く知っていますが、その水吸収の機構についてはまだ不明な点が多く残っています。また淡水ウナギを海水型にするにはコルチゾル（哺乳類ではストレス時に血中レベルが上昇）を1回注射すれば良いのですが、摘出した淡水ウナギの腸での水吸収の増大までの出来事（24時間内におこる）を知りたいと思っています。実験材料にウナギを使用していますが、実験後の処分因っています。御入用の方はP3-13に直接来られるか、お電話（内線3628）下さい。



地域文化コース

中山 富廣

(なかやま とみひろ)

1. 1956年4月2日
2. O型(?)
3. 長崎県南松浦郡
4. 田中裕子
5. 既婚

昭和62年4月、自分にとっては母校でもある総合科学部に着任した。かつて学んだところに就職するというのは、いろんな意味で複雑な心境であった。

昭和50年4月、高校から大学へ何も考えずに、この総合科学部に入学した。現在多くの大学生が入っていると思われるクラブ・サークルにも入らず、ただ范然と一日を過していたように思う。そんな状況のなかで1年の終りころに、古文書講読会に出さしてもらったのがきっかけとなって、日本史を学びたいと思うようになった。もともと漠然とであるが、理科系の方向に進もうと思こんでいた自分にとって、日本史を専攻することに若干の抵抗があったことを覚えている。当時「小学校の時に歴史の授業が好きであった」という、ただそのことだけで自分の選択を正当化(?)し、そしてその後はひたすら自分の軀に鞭打って勉強してきたような気がするのである。

ここ1年くらい仕事らしい仕事をしていない。色々ないいわけをしている（もちろん、学問的に非力であることはいうまでもない）。「雑用が多い。ワープロとパソコンを買ったからだ。授業の準備におわれて…」などと。現在近世日本の商品流通・市場構造の解明に興味をもって一応はやっているが、その事に取組むことの意義・究極の目的などに確信をもてていないのが原因らしい。これまで百姓一揆、藩政史、商業経営史などを扱ってきたが、どれも途中で放りだしてしまった。

歴史学会で、将来への展望の欠如（社会主義国の低迷・第3世界・核・環境破壊による人類の危機などに対する）、学說的展望の幼稚さ、したがって研究の個別分散化などといわれる状況が指摘されて久しい。私がつ

まらないことを最初に述べたのは、まさにその指摘通りに、これまで行ってきた自分の研究が展望を欠かし、個別分散的であることを示そうとしたからである。

この様な状況に対して開き直ることは容易であると思うが（もうすでに開き直っているかもしれないが）、これから先自分自身がどのような仕事をしていくのかまだわからない。研究・教育を通じて自分自身をもう一度しっかりと把握しなおして行こうと思う。



物質生命科学コース

宇田川 眞行

(うだがわ まさゆき)

1. 1950年6月27日生
2. O型
3. 東京
4. 人間として信頼できる人
5. 既婚 2女

私の研究は実験物理学という学問分野のうち、液体や固体などの特徴ある性質を原子や分子の微視的立場から明らかにしていこうとするものです。無論、微視的立場から解明する実験的手法は多岐におよんでいます。私の場合は主にレーザー光散乱を武器としています。レーザー光散乱とは、物体にレーザー光をあてると、物体からレーザー光と同じ色の光や異なる色の光が出てきます（これを散乱と呼びます）。出てきた色々な色の光は物体を構成する原子や分子の微視的な運動に関係しており、出て来た光を解析することによって、逆に原子や分子の微視的運動や状態を明らかにすることができます。光散乱などと言うと別世界の事のような気がする方もいるかもしれませんが、実は私達は光散乱の恩恵によって美しい自然を見えています。それは夕焼けや虹などです。光は波長が短い程よく散乱されるので青い光の方が赤い光よりもよく散乱されます。太陽から来た光は地球上の空気やゴミによって青い光ほど散乱されることになり、昼の空は青くなり、夕焼けでは赤い光の方が多く透過するので赤くなるという具合です。この有力な手段を使って行なっている研究は、主として超流動ヘリウムの研究です。超流動とは巨視的な量子現象で、私達が日常目にする水などの性質とは大きく異なり、どんな小さな穴でも抵抗なしに流れ出たりする特異な性質を持ちます。この特異な性質を原子の微視的立場から解明するには残された問題が多く、レーザー光散乱を使って解明しようとしている訳です。ただ特異な性質をよりはっきり出そうとすると、より低温が必要で、目下絶対温度で数10ミリ度の温度を発生させる超低温発生装置を作っています。以上私の研究の近況を述べましたが、最後に私の研究に興味を持たれた方がありましたら、気軽に研究室をノックして下さい。喜んで紹介させていただきます。

編集部から。このコラムは今回新しく企画されました。研究室あるいは講座を順次紹介していくもので、マンモス学部（教官団？）のコミュニケーション不足やコミュニケーション・ギャップを解消しようとする試みの1つです。紹介の仕方は、学生委員によるインタビュー主体の記事は研究室紹介、教官自身による紹介は研究紹介とし、1年間に7コース（7研究室）を紹介する予定です。御愛読ください。

研究紹介

現代分析化学考

自然環境研究コース 藤原 祺多夫

現代は多様性の時代と言われている。自然科学なく化学の発展は我々に豊富な物質をもたらす、現代を高度な物質文明社会としつつある。しかしこうした反面、現代人としての我々は、多様化した価値観、物質観に対応した生き方を強いられている。このような状況は私の専門分野である分析化学でも同様である。そもそも分析化学とは化学的手段により物質の分析法（検出法）を見いだしていく学問分野であり、従って対象となる相手に対応して迅速かつ適切な方法を考えて行かなければならない。日本の分析化学の成立を考えると、特に元素の存在状態や地球上の分布を解析する手法を考える分野として発展してきたといえる。つまり歴史的には無機化学・地球化学と強く関連したものであり、古い大学ではいまだに無機・分析系と呼ばれている。しかしその後の自然科学の発展とともに、環境、生体、医薬、農学、といった様々な分野で分析化学の展開が要請され、もはや理学部化学の一研究室では対応できないのが現状であろう。また分析化学自体も、様々な先端技術の発展と共に化学そのものにこだわる事なくその成果を取り入れて行かねばならない状況にある。こうした点で分析化学は、より総合科学的な学問分野であると言える。

さて話が大きくなってしまったが、自然環境としての分析化学を考えてみよう。環境系と言うのは分析化学的にみても面白い対象である。先にも述べたが、多様化した現代社会においては様々な化学物質

が合成・使用され、環境系へ放出されている。これらの環境系における循環と変性及び生態系への影響は未だ正確には把握されていない。例えば思わぬ環境破壊をもたらすものとして、最近のフロンやトリハロメタン問題は余りにも有名である。特に天然水を含めて水の系については、あまり分かっていない興味ある過程が多く含まれている。即ち大気圏における反応は、例えば光化学反応などかなり素過程まで解明されているが、水系ではこうした分野はほとんど手がつけられていない。短寿命化学種の発生、これらに対する金属イオンの作用・気圏との境界における物質収支・光の作用等々、それぞれを明らかにするための分析化学的手法の確立は極めて重要である。

こうした直接的な環境問題は別にして、人間の環境から受けるストレスあるいは感情に対して化学物質がどう対応しているのかも私には興味があり、こうしたテーマへも仕事を広げていきたい。生体系を含めた自然環境系における広い意味での分析化学が私の当面の興味の対象である。

さてこれまでに挙げてきた対象は極めて高邁なものであるが、現在行なっている研究としては、分光化学的即ち光を使った手法の展開を主に行なっている。以下助っ人として理学部及び近畿大学からきて頂いている2人の学生を含め3つの研究テーマについて具体的に述べてもらう。

半導体レーザーと光ファイバーを使った磷酸や硝酸の微量分析法の開発をしています。磷酸や硝酸は栄養塩類と言われ天然水における生物体の栄養源であり、その量を決定する化学的因子ですが、これが増加するといわゆる赤潮や富栄養湖が生じます。従ってこのイオン類を分析する方法は重要なので、自分で設計した鏡面反射セルをもとにして超高感度な吸光度法に基づく自動分析計を作っています。

リン酸は我々の生物体中でも複雑な有機化合物として存在している元素で、生命維持のためには不可欠なものです。こうした生活の化学に注目して、私たちは新しい分析方法の開発を目指しています。そのリン酸の測定はモリブデンのヘテロポリ酸生成に基づく比色法といったものに限られていましたが、私たちは全く新しい方法として、リン酸をホスフィ

ンに還元して、オゾンと混合するときの化学発光や、或は原子吸光の測定から定量する方法の確立を目標としています。そしてその方法が実際に環境分析に応用されることを夢んでいます。将来は、ホウ酸のボランへの還元などの化学反応を開発し、応用することも目指したいところです。

天然水において、微量金属がどのような挙動をするかについて調べています。現在は、特に、生物物質との相互作用ということに観点をしています。具体的には、DNA等の生体高分子に金属がどれだけ吸着するかを、金属の種類や、溶液状態などを変化させて測定しています。また、今後、レーザー光を照射し、溶液の化学反応の追跡をするという研究も行う予定です。

研究室紹介

数理情報科学コース 小野ゼミから

オカハラ君 先生の専門は数理論理学と聞いているんですが、数理論理学ってどんなことを研究するんですか？

小野 なんだ。そんな事も知らずに僕の研究室に来たのか。のんきだね。まあそうはいつでも、簡単に説明してくれなんていわれると、いつも四苦八苦するんだけどね。論理についての研究はアリストテレスに始まるっていいんだろうが、数理論理学というと19世紀末からのフレイゲとかラッセル以降のものを指すんだ。証明そのものの一般的性質を考えたり、記号表現としての命題とその「意味」との関係なんかを取り扱ったりする。そういう所で言語学やまた計算機科学の基礎的な問題ともからんでくるんだけどね。それと、数学基礎論とか計算理論も広い意味での数理論理学に含まれるんだよ。

オ なんです、数学基礎論って。

小 これはね、カントールが作った集合論にパラドクスが含まれているのがわかってね。20世紀の始めになって、数学の正しさはいったいどのようにして

保証されるのかということが問題になった。これが数学基礎論の発端なんだけどね。これについてはゲーデルの有名な結果がある。これだけの説明じゃなんにもわからないだろうね……。

オ ハア、ちっとも……。ま、それはそれとして、先生の研究室にいた人達はどんなテーマで卒論を書いたんですか？

小 そうね。自分でこんな事がやりたいという学生にはその方向でテーマを探す手伝いをするというのが僕の原則なんだ。テーマというと、最初の頃の学生で定理証明のプログラムとか、いまは市販のものが出まわっているけど数式処理のプログラムのはしりみたいなのを作った人がいたね。あと、もちろん数理論理学、そして数理言語学やオートマトン理論。最近では、関数型プログラム言語の基礎理論を勉強した人がいる。

たしかにテーマは種々雑多だけれど、基礎的なことをキチンと勉強することだけは身につけて欲しいと思ってるんだよ。

研究室紹介

地域文化コース 戸田ゼミから

一口にヨーロッパといっても広い。そこには様々な国、歴史、文化がある。東と西、南と北といった風に、いろいろな顔を見せてくれる。そんなヨーロッパを舞台に、ここ総合科学部のヨーロッパ研究で教官と学生が何を研究しているのか。その一片を紹介してみたいと思う。

ヨーロッパ研究の講座は、主にフランス文学、フランス史、ドイツ文学、ドイツ史、西洋哲学の講義、演習が中心となって開かれている。その1つである戸田吉信教官のゼミをのぞいてみよう。

戸田教官はフランス文学、特にギュスターヴ・フロベール研究（19世紀初め）を専門とされている。

～戸田吉信教官ゼミ～

我がヨーロッパ研究では、戸田教官の学部生対象の専門科目は、たった2つしかない。1つは講義形式、もう1つはゼミ形式である。前者は先生がご専門の“ギュスターヴ・フロベール”という作家の作品介绍、人間観などを述べられる。後者は原文の講読（学生が分担して進める）が主となる。ゼミは講義とは違って、よりポジティブな姿勢を要求され、重箱の隅をつつくようなことでも、学生が中心となってやることに意義を見出し、私はちょっぴり嬉しくなったりする。とはいえ、講義形式のものが全くネガティブで、退屈なものである訳ではない。むしろ私は、戸田先生の講義の方が好きである。

「はい、何ページを開けて」と言われるや否や、先生はその文学の世界へ入っていく。登場人物、作家、時代背景 etc. 奥深いところまで、熱っぽく語られる先生の目は、遠くを見つめていて、私たち学生には、到底達し得ない境地で、文学というもの、人間というものをかみしめていらっしゃるのだろう。暫く間がある。「うん、うん……。君、すまんが、ちょっと、その灰皿とってくれんか。」授業開始

後約40分、習慣のように、先生は喫煙なさる。ここでやっと先生と同次元になれる。先生は文学の世界から戻ってこられる。先生は無表情だ。私はタバコは嫌いだ。でも、「ああ、うまい」と煙から聞こえてくるようで、許してしまう。再び40分程、先生の陶酔ぶりに学生たちも酔い、「本日はここまで！」の先生の言葉で、目が覚める。

何だか、戸田先生のワンマン・ショーのようではあるが、それは、学生側の器が小さいことは勿論のこと、先生の文学に対する思いが、あまりにも熱く強いから……。まさしく、ロマンチストといえると思う。先生は、全身で、文学と自分の価値観とを学生にみせてくれるのである。

以上は実際に受講している学生の一意見であるが、そこから、戸田教官の授業の空気というものを、少しでも感じとっていただけたらどうか。補足として授業内容をもう少し詳しく紹介すると、戸田教官の「フランス文学研究」では、今年度前期は、「感情教育」又は「ボヴァリー夫人」というフロベールの作品を読み、後期には、フランス語原文の作品を、学生が一人ずつ訳を発表しながら読む、といった形で進められている。

現在、戸田教官についている学生は4年生が1人。3年生、2年生の中にもそれぞれ1人ずつ、先生について特別研究を進めようと希望する学生がいる。

聞くところによると、普段学生が実際先生と話をするのは演習のときぐらいだが、面倒見のよい、あっさりした性格の先生だそうだ。ともあれ、フランス文学や戸田教官に少しでも興味を持たれた方は、まず、自分の目や耳で講義や研究室をのぞいてみることをおすすめする。

(文責 矢野 泉)

第17回新入生オリエンテーションキャンプ

風薫る瀬戸内の自然のなか、新入生の笑顔が光る——17回目を迎えた新入生オリエンテーションキャンプが4月22日、23日、宮島包ヶ浦自然公園で開かれた。

総合科学部からは新入生、在學生（フェロー）、教職員あわせて183人が参加。全体では2000人強が集い、野外生活を楽しんだ。

初日の学部別行事では、数グループに分かれて宮島を散策する「総科ウォークラリー」を行った。コース途中のポイントでゲームをし、出来具合に応じてキーワードが与えられ、それらから連想される言葉を当てるといふもの。「学部長の願い」「安芸の国」などから連想される正解は「世界にはばたけ総科生」。汗をふきつつみんなで合唱。すべての人がやさしい笑顔を満面に浮かべていた。

夜はあいにくの雨に見舞われ、ミニファイヤーは中止となったが、翌日は天候がもち直しキャンプは無事に終了した。

このオリエンテーションキャンプは、昭和48年竹原市大久野島で第1回のうぶごえをあげ、回を重ねて17回。同時に行うキャンプとしては日本最大の規模とか。「用意した毛布は9000枚なのだ」と聞くとうなづける。

以前は2泊3日だった時期があったり、日程の中身もかなり違っていたり、17回目を迎えるまでにキャンプもいろいろと変遷してきた。「飛翔」のバックナンバーを調べると、28号（1985年3月）にキャンプの記事があった。少し紹介しよう。

昨年のオリキャンでは、我が総科では「アホの総科」というのを生かして、貝掘り大会をすることになっていた。しかし、掘っても掘っても貝は出ない。リハキャン（リハーサルキャンプ）の時はちゃんと出たのに、出ないのだ。これにはまいってしまった。でも新入生は、出ないなりに一生

懸命掘っていたみたいだったけど。（中谷さん）

しかし、いつまでも変わらないのは野外活動の醍醐味であり、なによりも人との出会いである。「総科ですごく毎日の大切なよりどころ」となるのは、友人や先生との絆であろう。

すべてのものが春色にきらめく4月、絆をつくる最初の機会がこのキャンプなのだ。

宇品港へ向けて動き始めた船の中で、みんなのはじけそうな笑顔を見て、そんなことを感じた。掘っても出ない貝を求めた、数年前のウスラ悲しい風景の中でも、みんなは笑顔だったに違いない。

キャンプが終わっても、いつも総科生は笑顔だ。



セーラー姿の天野学部長
後方に宮島カッパがみえる



行く手をはばむ63生(右)
困る01生 学部別行事より



やたらと元気な01生のひとびと

（文責 中家 伸之）

「新聞の素顔」

岡山和彦氏

(中国新聞社 国際部部长・論説委員)

はじめに

本年度第1回目の教養講座が、5月31日(水)15時10分から16時50分まで、総合科学部の305号室で49人の学生を集めて行われました。講師の岡山和彦氏は、昭和38年に広島大学の教育学部を卒業されて、中国新聞社に入社、その後25年にわたって記者生活をされ、現在は国際部の部長であり、論説委員もされています。

新聞は、現代社会において、ますます重要度が上がり、私達にとって身近で、かつ信頼度の高い情報源の一つになりました。それ故に、新聞に対するイメージ、記事の読み方、受け止め方は、私達の価値判断に大きな影響を与えます。

新聞をつくっている立場から、現場の人達の思いや自戒、読者への希望や忠告などを聴くことの意義は大きかったと思います。講演後は、約20分間でしたが、よくまとまったお話のせいもあって、活発な質疑応答がなされました。以下、岡山和彦氏のお話の要旨をまとめてみましょう。

要 旨

私は、実は〈3435002〉という広島大学の学生番号を持っています。昭和34年入学で教育学部の中学校の美術を専攻していました。中国新聞社へは、美術評論をやりたいということで入社しました。いまからお話致しますが、新聞社にはいろんな記者の養



成の仕方がございまして、もう25年間、記者生活をしています。

入社後まもなくして、私が担当したことで忘れられないのは、昭和44年の大学紛争と昭和45年の安保闘争です。今日は、タクシーでさっと正門から入ったのですが、大学紛争の時は正門も6つくらい迷路のようになったバリケードを通らないと入れませんでした。

当時、新聞記者だけは、フリーパスということで中へ入れました。丁度今の本部の建物のところに記者クラブがありました。昭和44年8月に機動隊も入り、新型の火炎ビンも投げられて、封鎖解除になりました。記者クラブも無茶苦茶になった訳ですが、なぜか中国新聞の電話だけは無事でした。自分の母校をこの様な形で取材するとは思いませんでした。

いま思いますのに、あの大学紛争と70年安保は、我々新聞記者に取っても、大きな問題提起をもつ、考えさせられる事件でした。大学改革なり、これからの新しい時代の日本をどうするのか、ということを生徒諸君と共に語り合ったりしたことがありました。

新聞記者というのは、大体、一つの事実と事実を取材して、それらを並べ出し、自分の考えを言わずに「客観」と称して書くのが、一つのスタイルでした。しかし、70年安保の頃から新聞記者も自分の意見をもって書くという風潮が強くなって参りました。

ところで、日本新聞協会に加盟しているのは、全国で約160社、そのうち約50社がテレビで、残りの約110社が新聞社です。新聞社は、全国紙・地方紙・スポーツ新聞・朝刊夕刊各種合わせて一日に約6,500万部が発行されています。5年くらい前にアメリカが一日に約5,000万部の新聞を発行し世界第1位でした。いまはアメリカを抜いて、日本が世界第1位となりました。

これだけ新聞が発行されるということは、一つの文化、特に民主主義のバロメーターでもありましょ

う。共産圏では、例えば「ブラウダ」などは、一日に1億部程発行されていますが、これは党の機関紙であり、自由主義国でいう新聞とは性格が違います。

情報化時代となり、やはりマスコミ、特に新聞の果たす役割が大きくなりました。しかし、その一方で、新聞に対して読者の幻想というものがありますし、新聞そのものにも「虚像と実像」があります。そこで、新聞というものを正しく理解し、情報に流されないようになっていただくために、その7つの素顔に絞ってお話を進めたいと思います。

第1の素顔は、新聞社とは畑違いの人たちが集まったところだということです。私自身の経歴もそうですが、医学部や工学部卒など、殆ど全学部の出身者がおり、ますますその傾向が強まっています。ただ、如何なる分野の出身者であろうとも、新聞記者としての素養として大切なのは、次の4点でしょう。第1点は、積極性、意欲、すなわちやる気があること。第2点は、新聞記者の専門性ともいえる「何故。何故。」と問い続ける探究心があること。第3点は、正義感があること。第4点は、気力と体力があって、タフなことです。

第2の素顔は、個人としての確かな考え方が要求されることです。誤解され易い表現ですが、社説は、実は私説であるといえます。速報性がテレビに奪われて以来、新聞など活字メディアに対する読者の要求が、ものの表面的なものではなく、裏にあるものをえぐり出して欲しいという方向へ変わってきています。そのため、署名入りの解説や論説などが増え、社説が新たに脚光を浴びてきています。掘り下げた記事が求められる時代になってきたわけです。まずは記者自身がしっかりとした考えや主張を持つことが大切で、それが社説にも反映されていくわけです。

第3の素顔は、客観的報道と言われますが、実は主観的報道へ傾斜をしてきている実態があります。事実と真実とは違います。客観と称して、そこにある事実を並べて書くだけでは不十分です。記者の主観や生きざままで、何故？何故？と事実の裏側にある真実を追求していくことが大切です。それがなかったら説明できなかった事件や問題は幾つかありまし

た。無論、記事というものは、公正であることが基本です。

第4の素顔は、「書かない勇気」がいるということです。無論、書くことによって、リクルート問題のように、巨悪を倒すという勇気も大切です。しかし、新聞報道によって世の中に害になること、例えば名前が出たばかりにその人が逆恨みされたり、利用されたりすると明らかにマイナスが予想される場合は、書かない良心も大切です。ただ、何を書かないかを見極めることは、大変に難しいことです。権力や金力に負けることなく、新聞が書くべきことを放棄しないということは、何れにしても新聞の生命であることに変わりありません。

第5の素顔は、新聞記事には、私情は許されぬことです。私たちは、次の7点に留意し記事をチェックしています。第1は、記事が公正かどうか。第2は、用字用語は正しいかどうか。第3は、記事の論旨に矛盾はないか。第4は、記事には連続性がありますから、これまでの記事との関連性はどうか。第5は、人権が守られているか。第6は、記事の掲載によってどの様なプラスとマイナスの面があるか。第7は、記事が独断と私情に陥っていないかということです。

第6の素顔は、新聞は、二紙以上を併読するのが望ましいことです。「一つの富士より八が岳」という言葉がありますように、記事を相互に比較し、多様な主張と見方で価値を認める姿勢が大切だと思います。

第7の素顔は、訂正を出す新聞は、いい新聞だと言えることです。これは逆説的な表現ですが、訂正をきちんと出す新聞は良心的で、それだけミス防止公正保持に心をくだしている証拠といえます。「新聞の新聞」はないので、公正な新聞を見極める目安の一つでもあります。新聞記者として、記事を書く場合にいろいろ配慮しているものの、新聞が犯しやすいミスには、次の様な5つのタイプがあります。すなわち、虚報・歪報・誤報・禍報・無報です。自戒しています。
(文責：学生生活委員会・教養講座担当・堀 信行)

平成元年度 春の総科ソフト

平成元年度春期ソフトボール大会が、去る5月28日(日)、南グランドで行われました。総科生になりたての、01生の中には、どうしてバレーでなく、バスケでなく、ソフトボールなのだろうと、素朴な疑問を持つ人もいたのではないのでしょうか。

飛翔のバックナンバーをさかのぼってみると、昭和50年の学部長杯争奪春季球技大会(ソフトボール)が、そもそものはじまりのようです。学生220名、教職員30名というその参加状況から、なかなかの盛り上がりを見せていたのではないかと思います。昭和50年という、総科が誕生して2年目なので、ソフトボール大会は、総合科学部と共に歩んできた、歴史の古い伝統的行事といえます。最近、学生+OB参加の大会となっていますが、10年前は事務部のチームが優勝したり、学部長も参加されたり、学生と教職員の交流の場となっていたようです。

このように歴史ある総科ソフトですが、結局どうしてソフトボールなのか、よくわかりませんね。きっと第1回球技大会の企画者たちが、ソフトボールが好きだったのでしょう。おそらく……。

ところで今年の春の総科ソフト。これ以上のソフト日和りはないぞっ!というような快晴の中、20チームが熱い暑い戦いを展開しました。優勝候補と言われていたのは、目下16連勝中の4年社会科学

チーム。しかし、トーナメント表を御覧の通り、4年情報行動科学がこれを下して決勝戦へ。一方、投打共に冴えていた2年文系が、あれよあれよと4試合を勝ち抜き、決勝進出。そして、決勝戦はさすがに緊迫した空気の中、追いつ追われつ進められました。押し気味だった2年文系は、決め手の1本がここぞという時にはず、やはり場慣れた4年生のすかさずもぎとった5回の3点が、結局決勝点に。んーおしかったね。と思わず私情が入る。

優勝……………4年情報行動科学
準優勝……………2年文系
3位……………4年社会文化
敗者復活優勝……………4年環境科学
最優秀賞(男)……上野竜也(4情報ピッチャー)
 (女)……………野口真理子(4環境)
ホームラン賞(6本)…………丸田敏晴(2文系)
 次点(5本)…………中川裕治

こうして結果を見ると、やはり先輩方は強し、というところでしょうか。大会のしめくり、学生会館で打ち上げが行われました。みなさん、本当にお疲れ様。

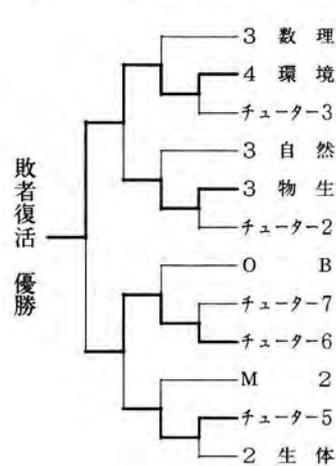
今回参加しなかったみなさんも、次回は、是非顔を出してみてもはどうですか。ちょっとした青春の1ページをかいまみることができそうです。

(文責 野村 幸代)

春の総科ソフトトーナメント



— 敗者復活戦 —



梁父吟 習作

山本 みつね

歩出齊城門、遙望蕩陰里……

聞こえてきた歌声に、青年は覺えず足を止めた。
襄陽、秋八月、彼の周囲にも、涼やかな風が吹いている。

里中有三墳、累累正相似……

彼は首をかしげた。それは、彼の遠い故郷の吟であった。彼と同じくその吟を知る弟と妹は隆中の家にいる。此処に来てゐる筈はない。

不思議に思つて辺りを見回した彼の目に。庭の李にもたれて所在なげにしている娘の姿が止まった。着ているものからすると、良家の娘だろう。吟の主は彼女であった

問是誰家墓、田疆古冶子……

まだ十三、四のその娘は、暫くは彼の目にも気付かず歌っていたが、やがてふと目が合うと、戸惑つたように歌いやめた。彼は微笑すると、ちょっとした興味と連れだつて、李下へ寄つていった。

「貴女は、齊の方ですか？」

問いかけながら、娘を見下ろす。

「いいえ、襄陽の沔水の南に住んでゐる者です」

改めて近くで見ると、世辞にも美しいとか愛らしいとかは言えない容貌の娘であった。黒くつややかであるべき髪は赤茶けており、白くきめこまやかであるべき肌は浅黒い。痘瘡の跡もある。

「では、今の吟はどなたかに教わたのですか」

それなのに余り醜いとは感じられないのが不思議だと思いつつ、彼は重ねて尋ねた。

「教わたのではございません」

娘はややうつむき加減に、しかしはっきりとした声で答えた。

「七日ほど前、今日と同じように父に付いて此処へ参りました時、聞いた吟です。お姿は見ませんでした、大層良いお声で吟じていらしたので、私もつい覚えて、此処数日口ずさんでおります」

青年は苦笑した。彼以外に、此処でその吟を口にする者はいないのだ。

それにしても——彼は思った——たった一度聞いただけで、誦じてしまつてゐるとは。

「貴女のお父様は、よく此処へいらっしゃるのですか」

「たまに参ります」

娘は笑い、彼を見上げた。

「どうして私のような醜い小娘が、徳操先生の許へ、父の伴をしてとはいへ居るのかとお思いなのでしょう？」

「え——そのようなことは」

彼はいささか面食らい、目をしばたいた。

「私は、自分が人から指差されるほど醜いことは存じておりますし、特に貴方のような美貌の方を見ると、余計にそれを感じます。それを嘆いたこともございます」

けれど、と娘は再び笑つた。

「この醜貌ですから、為政者を惑わして城を傾け、民に災いをもたらす女にだけはならないでしょう」

人柄なのか、台詞の内容の割に、嫌味な所は微塵もない。青年は、娘から「美貌」と評された顔をほころばせ、思はず声をたてて笑つた。

「貴女の言葉を聞けば、少しばかりの見ばえの良い悪いを重大事と思う傾城達も、少しは心に愧じるところがあるでしょうね」

彼は言い、また破顔した。

緩やかに空気が動く。

表の方が、少し騒がしくなった。

「澄瑩、澄瑩や——戻ろぞ——」

流れてきた声に、娘はハッと体を動かし、た。

「父が呼んでおります——それでは私は」

青年は軽く礼を返すと、穏やかに微笑んだ。

「いずれ、また」

決して儀礼ではなく、本心から彼は言った。娘は再度戸惑つたような顔をしたが、改めて礼を残し、場から去つていった。彼はその後ろ姿を見送りながら、歌い馴染んだ吟を、低く口ずさみ始めた。

澄瑩。この時青年がその字を胸に刻んだ娘は、後世の私達には勿論、黄氏という姓のみしか残してくれてはいない

<了>



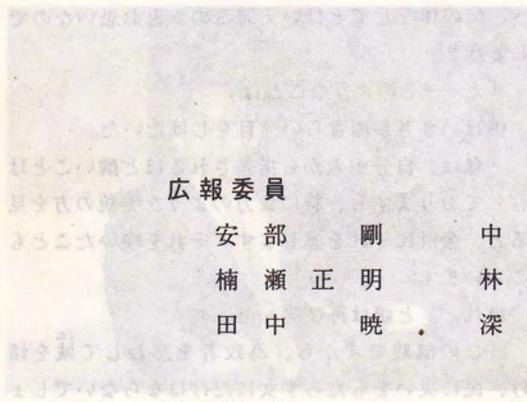
初心忘るべからず

お母さん、お父さん、お兄さん

総合科学部長 天野 賢

初音の成長、お母さんの成長、お父さんの成長

……里前高野、門前川出



広報委員

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 安部 剛 | 中根 周歩 | 間瀬 茂 |
| 楠瀬 正明 | 林 春男 | 水島 裕雅 |
| 田中 暁 | 深宮 齊彦 | 森 利一 |

事務官

- | | |
|-------|-------|
| 宮原 和男 | 内田 精二 |
|-------|-------|

学生編集員

- | | | |
|--------|-------|-------|
| 伊藤 多喜子 | 小松 千尋 | 野村 幸代 |
| 稲垣 豊 | 斉藤 隆 | 浜田 明美 |
| 内山 清美 | 定行 美佳 | 布川 克彦 |
| 岡村 美穂 | 下野 寿子 | 福永 弘樹 |
| 海佳 隆雄 | 杉原 由香 | 宮尾 佳道 |
| 川本 瑞恵 | 高橋 真澄 | 森 香理 |
| 岸本 詩子 | 戸敷 聡 | 矢野 泉 |
| 桑原 秀行 | 中家 伸之 | 山崎 明子 |

広島大学総合科学部広報委員会

住所：広島市中区東千田町1-1-89

電話 (082) 241-1221

総合科学部ならびに『飛翔』の15周年を迎えて

広報委員長 水 島 裕 雅

広島大学総合科学部は今を去ること15年前の昭和49年6月に教養部を改組して創設された。また総合科学部報『飛翔』も今年度中に15周年を迎える。

総合科学部が創設された時代は、全国的に大学紛争の嵐が吹きまくったあとでもあり、当時大学改革は時代の急務であった。しかしながら、全国に先駆けて創設された総合科学部は、いわば精密な羅針盤もないままに荒れ狂う海に乗り出した旧型の小船のようであり、しかも航海を続けながら、船体を塗りかえたり、大改造を施したり、乗組員の意識革命や補充を行わなければならなかったのである。その前途には大きな期待と不安とがあった。筆者はたまたまその小船に乗り合わせ、その改造を見、ともに進んできた。その記録である『飛翔』の15年をふりかえり、その創刊時の思い出などを語ることで『飛翔』のさらに高く、遠く、永続せんことを祈りたいと思う。

教養部時代には『広大教養』という教養部報が教官の手で編集されていた。それが『総合科学』と改名されて発行されたのは、総合科学部が発足した昭和49年の7月のことであった。これも広報委員会の教官の手で編集されたものである。当時の広報委員の1人であった筆者は『総合科学』の「編集後記」にやはり船の比喩を用いて次のように書いた。「ところで、すべての航海に航海表や航海図が必要であり、それらが無い場合には正しい観測により、それらを作成しなければならないし、また航海日誌をつけなければならない。ここに『総合科学』を創刊するゆえんがある。」「総合科学」が『飛翔』となった現在では、船の比喩は飛行機かロケットの比喩に交

えなければなるまいが、その基本姿勢を変える必要はないだろうと思う。

ところで『総合科学』は1号のみで終わった。次号からは学生側編集委員が公募され、教官側編集委員との合同編集委員会がもたれるようになった。『飛翔』という名も「百をこえる応募名の中から」選ばれたと『飛翔』創刊号の「編集後記」には書かれていた。「日本で最初の総合科学部の創設と発展のためには、学生側の主体的参加が是非とも必要であるという考えは大方の意見でもあったと思う」と『飛翔』27号の「『飛翔』創刊のころ」の中で筆者は書いている。

思い返せばこの15年間にはいろいろな事があった。『飛翔』の36号までの分厚いバック・ナンバーにはいままでの総合科学部の歩みが書かれている。数多くの喜びや悲しみを経験しつつ、総合科学部も『飛翔』も15歳になろうとしているわけで、昔風といえば元服の年頃である。

この機会に総合科学部の将来のためにも今までの歴史を振り返ってみたらどうかという筆者の提案は、幸いにして教官側、学生側編集委員の賛同を得、学生側委員の多大な労力と、教官側委員と事務官の協力とによって、15周年特集号が組まれることになった。この37号はいわば「内から見た」総合科学部の15年であるが、次号は卒業生や退官者や外部の人々の「外から見た」総合科学部15年の特集を組みたいと思っている。

ぜひ御一読のうえ、読者諸賢の御意見、御感想などを広報委員会までお寄せいただければと思う。

1989年5月26日記す